



第2回ハヤヒナ合同本

Spring up in the Spring of Life

(表紙・挿絵イラスト ピーすけ)

※この合同誌は、「ひなゆめファンの止まり木」内で募集した原稿をまとめた、有志による「ハヤヒナ合同本」の第二弾です。

公開サイト ひなゆめファンの止まり木 (<http://soukenshi.net/perch/>)

企画趣旨説明・小説投稿掲示板 (<http://soukenshi.net/perch/sp/hayahina02/patio.cgi>)

第2回 ハヤヒナ合同本 目次

(著者名は敬称略)

祈り叶うとき	瑞穂	6
桂流剣術指南ノ書 卷ノ五・秘伝奥義編	明日の明後日	26
ハヤヒナ結婚後に待ち受ける超不幸《評論》	双剣士	46
謎解きはデートのあとで!?	どうふん	58
extra nightmare	春樹咲良	62
エピローグ ―それでも花は咲いている―	ロッキー・ラックーン	72
ヒナギク様は告らせたい	双剣士	84
ハッピーエンドをいつか二人で	レン・リー	98
あとがき		113
編集後記		123

祈り叶うとき

瑞穂

まえがき

拙作はカップリングSSということで、柔らかい口調で執筆させていただきました。

多少読みづらいところはあるかもしれませんが、それでも読みたい、読んでみようという心の広い方はお読みください。

それでは本編をどうぞ。

「いよいよ明日ね」

「そうですね。年に一度のお祭りですから謳歌したいですね」

「まあ、私たちも舞台で謳歌しなくてはな」

「ああ、そうだな」

「……」

「いい思い出になるといいですわね」

ここは三千院家の一室。

文化祭を前日に控えた夜、夕食とお風呂を済ませた私、桂ヒナギクは、愛歌さん、千桜、ナギ、カユラ、そしてアテネとともにソファーに寛いで楽しくお話ししています。室内の空気はまさに、季節の雰囲気を醸し出すように清々しいです。

何故白皇学院に在籍するゆかりちゃんハウスのメンバーと愛歌さんがお屋敷にいるのかについては後述しますが、全員が明るくおしゃべりしながら過ごしています。

そこへ執事服を着た、青髪の若者が紅茶を持って入ってきました。

「おお綾崎くん、いつもありがとう」

千桜のお礼に笑顔で応える少年はこの家の執事、綾崎ハヤテくん。クラスメイトで友人でもあり、同年代の男の子よりやや身長は低いものの青髪とスレンダーな容姿が可愛らしく、穏やかで自分よりも他人を優先する心優しい若者です。しかし残念なことに恋愛感情については、相手がアプローチをかけているにもかかわらず気づかないほど鈍いのです。

まあ、そのエピソードに関してはここで話すと非常に長くなりそうですから、触れないことにします。

話をしながら時々、火照った顔でハヤテくんの方にちらりと視線を送ります。今年の三月、ハヤテくんの事が好きだと気づいたその気持ちは、あれからも変わっていません。しかし恋愛については屈折した思想、素直でない心が災いして、私は未だに想いを伝えられていません。

——単純に「好きです」と言うだけではハヤテくんの心に響かないでしょう。どのような言葉をかければこの鈍感男に振り向いてもらえるのか、私の気持ちに気づいてもらえるのか——教えてくださーい！

秋の涼風を浴びながら寝室に戻る最中には空にかかるお月様へ、神様へそれぞれお祈りするのでした。



修学旅行も終わり、爽やかに澄みきった秋晴れが広がる一〇月のある日、私のクラスでは翌月の文藝祭に向けて、出し物を検討していました。

各々が真剣に考えていましたが、なかなかこれといった意見は出てきません。

そんな中でハヤテくんが合唱を提案しました。

「以前とあるアイドルのコンサートを聴いたことがあります、歌というのは人を惹きつける力があるんだと気づいたからです。」

最大の理由は、単純に言いますと楽しいからです。皆さんでひとつのものを作り上げることは大変ですが、すごく楽しいでしょう。それにこうして出来た仲間っていうのはかけがえのないものなんだと思います。ですから皆さん、思い出づくりとして合唱に参加してください！」

最初は納得いかない生徒もいましたが、ハヤテくんの熱弁を聞くうちに多くが納得した模様でしたので、結局のところ私のクラスは午前、午後と二度にわたる合唱に決まりました。

なお指揮者は私、ピアニストはナギが務めることになりました。

数日後の放課後、いつものように音楽室における練習と生徒会活動を終えて帰宅しているとき、私ははっと気がつきました。

現在ハヤテくんとは、こうやって一緒に帰ったり連絡を取り合ったりしています。それに私とハヤテくん以外の男子生徒とは、事務的な関わりはありますがプライベートにおける関わりを持っていませんから、ハヤテくんに近づくチャンスはプロログで挙げた子たちやこのSSには殆ど出てこない歩よりも、明らかに私の方が多いいじゃないですか！

神様、このチャンスを生かしますように、どうかよろしく願います。

西の空に沈みゆく太陽に向かって祈るのでした。



ところが翌朝、私が千桜とともに登校すると、目を疑う光景が飛び込んできました。

親友でライバルのひとり、泉が迷惑そうにしているハヤテくんにはお構いなしに、背後から抱きついてイチャイチャしているのです。

「ハヤ太くん大好き〜」

慌てて私は二人のもとに向かい泉を引きはがしにかけましたが、なかなか離れようとはしません。

「何やってんのよ泉！ ハヤテくんから離れなさいよ！」

「いやだよ、ハヤ太くんと一緒にいたいよ！」

非力な泉と剛力な私。実力差は明らかですが何故かハヤテくんと泉はくっついたままです。

騒ぎを聞きつけて他の生徒たちも集まってきました。

そこへ千桜が加わり漸く束縛は解きました。泉が抱く愛の力とはこれ程のものなのでしょうか。

「泉、何のつもりよ！ ハヤテくんが迷惑しているじゃない」

ふうふうと少し息を切らしながら問いかける私の表情には、明らかに焦燥の色が浮かんでおり、対照的に泉は好きなハヤテくんに近い距離で一緒にいられた為か、喜びに満ち溢れています。一方でハヤテくんは疲労感を漂わせています。

「そんなことないよー？ ハヤテくん楽しそうだよ」

ピント外れな返答に私の怒りのボルテージは一層高まります。

「どこがよ！ あなたは楽しいでしょうけれど、ハヤテくんは迷惑して疲れているじゃない！ 可哀想だと思わないの!？」

周りに多くの目があるのも忘れてたまらず私は叫んでしまい、気がついたときには恥ずかしさで顔を紅潮させていました。

「……まあ、今後は他人の迷惑を考えて行動してちょうだい。分かったわね？」

ひとつ咳払いして、自分のことは棚に上げて注意したのでした。

「うん、分かったよ。ハヤテくんごめんね」

神妙な顔つきで謝ったと思ったら、一転して明るい笑顔で校舎内に消えていきました。

「あの子の明るさには敵わないわね……」

溜息をつきつつ、傷心のハヤテくんを慰めながら教室に向かったのです。

……あ、泉にどうしてハヤテくんにあんな真似したのか聞き損ねたわね。まあいいわ。今度は私がハ

ヤテくんに告白して、彼のハートを掴みます！

この希望が叶いますようにと、青空に向かって祈るのです。

○ ○

その日の放課後、私と愛歌さん、千桜は手伝いに来てくれたハヤテくんと共に生徒会活動をしていましたが、少年に気になることがありましたのでぶつけてみました。

「ハヤテくん、ちょっといいかしら？」

「なんですか、改まって？」ハヤテくんは笑顔で応じました。

「まだ練習を始めて日が浅いから仕方ないかもしれないけど、皆歌声が小さいじゃない」

「そうですね、僕もそれは気になっていました」

「まあ確かにこの時期は、大きな声で唄うよりも歌詞を覚えて音を合わせるのが優先だからな」

「そうですね」

懸念に、それを聞いた三人も同調します。頷き満足する私。

「そこで提案なんですけど、私たちだけでも練習してレベルアップしたいのよ。」

愛歌さんはソプラノ、千桜はアルト、ハヤテくんはテノールのパートリーダーだから、三人が音を合

わせるだけじゃなく大きな声で歌えば、自然と全体の声量が会場に響くくらいになると思うわ」

愛歌さんと千桜は首を縦に振るものの、ハヤテくんは悩んでいるようです。

「僕も特に異論はありませんが、放課後以外にいつ、どこで練習するんですか？ 早朝や夜に音楽室を使うわけにはいきませんし」

「その点は問題ないわ。私たちだけでも夜に、ナギのお屋敷で練習すればいいんじゃないかしら。泊まり込みで。」

ナギに使わせてもらえるようにお願いしてもらえないかしら、ハヤテくん」

実はこれ、今日のお昼に生徒会の用事で時計塔へ向かっていたときに、愛歌さん、千桜と話合った計画なのです。

それを聞いてハヤテくんは賛成してくれましたし、ナギにもこの件を話した結果、容認してもらえました。

泊まり込んでその成果が現れるのは、また別のお話です。

拙作は私とハヤテくんのラブコメであって、合唱ネタではありませんから。



翌日の夜、ゆかりちゃんハウスのメンバーの中で歩を除いた、白皇に在籍する四人と愛歌さんは、清冽な水のように清々しい空気の中お屋敷に向かいました。因みに理事長のアテネは付き添い、歩はアパートでお留守番です。

お屋敷に到着して早速リビングの一部屋に案内されると、そこにはピアノと伴奏役のナギがいました。

「おまえらよく来てくれたな。ハヤテからどうしてももうちで練習したいと要望があつてな、私だって失敗したくないのだから練習しよう」

普段のナギからは考えられない発言と意欲ですが、ナギ元来の負けず嫌いとしたちの行動に触発されてか、やる気になっているみたいですね。

練習の様子は割愛します。

全員が夕食と入浴を済ませると、何故か私はハヤテくんの部屋に向かいます。因みにパジャマはアパートから持ってきたものを着ています。

ノックをして入室の許可を得ると、部屋に入っていきなりハヤテくんが口を開きます。

「ヒナギクさん夜遅くまでお疲れさまです。どうしましたこんな遅くに？」

いたって普通の表情と会話で私を迎えてくれました。

「ハヤテくんもお疲れさま。この調子で頑張りましょう。それとナギに話を通してもらってありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

私の笑顔にハヤテくんも笑顔を浮かべています。しかしここで私は神妙な顔つきに変わります。

「……ねえ、お願いがあるんだけど聞いてもらえないかしら？」

「な、なんですか改まって」

このときお願いしようとする私の心臓は跳ね上がり、緊張しています。

それはそうです。今から言おうとする内容は、この年頃では通常あり得ないことです。

「ハヤテくん……私と一緒に寝てください」

そう、これが私の本意。「一緒にいたい、離れたくない」のです。

「なっ!?! 何言っているんですかヒナギクさん！ 僕たちまだまだそんな関係ではないですし、大体常識で考えてもまずいですよ！」

当然ハヤテくんは顔を赤らめて断ります。冷静に考えてみれば私たちは恋人同士ではありませんし、順序としては告白が先です。道徳的に考えてもいけない事ですし、もし間違いが起きてしまったら今の私では責任を取れません。

二人とも誠実で責任感が強いので、ハヤテくんにしても私がこんな発言をするのは意外だったのでしょうか。

「私も自分ではいけない事だと思うわ。けど、ハヤテくんと少しでも長くいたいものよ！ その気持ち
を解ってよ……」

普段は決して見せることのない私の涙。泣きながら懇願する姿を見てハヤテくんははにかみながら、
「分かりました。それじゃあ今夜だけですよ。」

ただし間違っても襲ってこないでくださいね。お願いしますよ」

「うん、約束するわ。どうもありがとう……」

そう言うとハヤテくんの胸に顔を埋め、目から水滴を垂らしながら頬を赤らめるのでした。

これだけ気持ち伝えれば鈍感なハヤテくんでも気づくはずだと信じて、好きな人と一緒に一夜を
明かしました。こういうときの女の涙は強いですね。

この関係が、そして二人が結ばれますように神様、仏様どうかよろしくお願いします。



十一月になり、負け犬公園の木々が紅葉し、その葉の先端が赤く染まり秋風に敏感にそよいでいま

した。

木々と同様に、合唱の練習も熱を帯びる最中、本番の五日前になって私の身近で健康上のハプニングが発生しました。なんと合唱の大黒柱でもあるハヤテくんが、執事と生徒会における過労で倒れてしまったのです。

いや……いやよハヤテくんが舞台上に立ってないなんて、何よりも一緒に文化祭を過ごせないなんて……。

それにごめんなさい。倒れるまで無理をさせてしまった私にも非がありますから、責任をもって復帰できるようにしてあげますから。

だからお願いハヤテくん、早く病気を治して元気になってください。

ハヤテくんが倒れた悲しみを振り切るように私は歌の練習に打ち込みました。勿論自分自身の健康に気を使いながら。それは他のメンバーも同じようです。

ハヤテくんが養生している間もお屋敷での練習は続けられました。その一方で私だけではなく、練習に参加していないアテネとマリアさんも交替で看病を続けたのでした。

アーさんとマリアさんも看病してくれて嬉しいです。でも何故かヒナギクさんに面倒を見ていただけるのが一番幸せですねえ。早く元気になって皆さんと一緒に過ごしたいです。

……あれ？　一緒に過ごしたいといえば、先月どうしてヒナギクさんは僕と一緒に寝たい、少しでも長くいたいなどと仰っていたのでしょうか。夕食作りを手伝いたいとも仰ってましたけど、お客さんなので結構ですとお断りしましたね。

あれ以来流石にベッドを共にしてはませんが、殆ど毎日僕の部屋へ来てお話しさせていたでいますし、料理を手伝いに来てくれます。それにいつもヒナギクさんの方から登下校を誘われますけど、ヒナギクさんは決してストーカーではありませんから。

——と思いかけて僕はひとつの仮説、結論に辿り着きました——

その後、一刻も早く復帰したいという自分自身の意志と看病してくださる方々の期待に応えたいが為に、僕は不死身の身体をもって二日後に復帰しました。幸い本番当日までには喉と声についての懸念が払拭されたので、ハプニング当時クラス内に広がっていた動揺もなくなりました。

一方の私ですが、合唱本番前夜になっても、ハヤテくんを好きな気持ちに変わりはありません。明日の文化祭当日、ハヤテくんに告白します。

——神様、明日の告白が成功しますようにどうかよろしく願います。

ハヤテくんが私の気持ちに気づいてくれますように、そして受け入れてくださいますように——



いよいよ今日は文化祭当日です。

一旦、お屋敷に宿泊していたゆかりちゃんハウスのメンバー全員が、アパートにお屋敷で過ごした際の荷物を置きにいき、愛歌さん共々その足で登校します。

私は宿泊用バッグを置きがてら、机の引き出しから何かを取り出し鞆に入れました。

中身は後のお楽しみということで。

合唱のウォーミングアップを除いて、私にハヤテくん、愛歌さん、千桜、ナギの五人で各クラスの出し物を見て回りましたが、占いや喫茶店、ゲームなどいずれも楽しく満足できるものばかりでした。引きこもりのナギも笑顔を浮かべるくらいなの。

勿論、私のクラスが主催する合唱も大成功を収め、クラスの誰もが後味のいい出来と結果に笑みを浮かべて、祭りは無事に幕を下ろしました。

しかし私の祭典はまだ終わっていません。

午後の歌唱が始まる前にハヤテくんを呼び出し、「祭りが終わったら話があるから」と伝えました。

そして私は現在、ハヤテくんと初めての出会いを果たしたあの木の下にひとりでいます。

もう陽が沈んだ空は茜色から濃紫になりました。つづありますが、まだハヤテくんの姿は見えません。そろそろ約束の時間なので来てもいい頃ですが。

「ハヤテくんまだかしら」

そう独り言を呟くと、私は急に寂しくなりました。今年の三月、一六歳の誕生日を迎えた時にはハヤテくんがアクシデントに見舞われましたのでしようがないですが、今回はどうしたのでしょうか。

ハヤテくん早く来て……好きというこの気持ちを伝えさせてよ。ああ神様、仏様、私の想いを素直に伝えられますように、どうかよろしくお願いします。

俯いてそう念じながら、地面に向かい手を合わせるのです。

「あれ？ ヒナギクさん何しているんですか？」

「ハ、ハヤテくんいつの間にも!?」

呆然と尋ねるハヤテくんに気づかなかったので、思わず甲高い声を上げてしまいました。

「つい今しがた着いたところです。ヒナギクさん、遅れてしまいどうもすみません」

首を垂れる彼に私は慌てて助け起こします。

「謝らなくてもいいわよ、私もさっき来たところなんだし」

お互いに気持ち落ち着かせると、ハヤテくんが沈黙を破ります。

「それでヒナギクさん、お話ってなんでしょか」

我に返り深呼吸すると、先程の気持ちを整理します。

「ハヤテくん、大事な話があるのよ。しっかり聞いて」

真剣な表情の私にハヤテくんも締まった表情で頷きます。

「私、あの誕生日の時からあなたのことがずっと好きなの！

いつも優しく笑顔で面倒見のいいハヤテくんと一緒にいたいので！

お願いします、私と付き合ってください、これからも私を守ってください！」

ハヤテくんの目を真っ直ぐに見て、彼の手を握りながら叫ぶように伝えました。その時私は赤面しながら肩を震わせていました。

言えた、言えたじゃないヒナギク。やっと想い人に対して素直な気持ちを伝えることができました。ハヤテくんお願い、この気持ちを受け止めてください。

刹那。私の体は締めつけられるような感じがしましたが、決して苦しくはありませんでした。寧ろ温かく心地良かったです。気がつくときハヤテくんを抱きしめられていたのです。あまりの嬉しさに肌が燃えるようでした。

「ヒナギクさん、僕もあなたのことが好きです」

その台詞を聞いた瞬間、心が幸せに包まれるのが自分でもはっきりと分かりました。

「それにお屋敷で過ごしていた時に僕の元へ来て、お話ししたり家事を手伝っていただいたりしていいんですけど、あれは僕とずっと一緒に過ごしたい、離れたくないということなんですよね」

「うん……ハヤテくんの言う通りよ。ハヤテくんとずっと一緒にいたい。これからは恋人としてよろしくね」

そういう私の目からは嬉し涙が溢れていました。好きな人に漸く気持ちが伝わり、結ばれた喜びで満たされたのですから。

「ありがとうございます。こちらこそよろしく願いますね」

ハヤテくんがそう言ったのを確認すると、私は彼の顎に両手を当てて目を閉じました。

「ハヤテくん……」

すると私は自分の唇を近づけて、ハヤテくんとキスを交わしました。

時間にしておよそ三秒、私が大切にとっておいた「初めて」を、人生において最高の形で大事な人に捧げることができたので、大変嬉しく思います。

神様、仏様、私のお願いを叶えてくださり本当にありがとうございます。

まだまだ未熟な私ですが、こんな私を見守っていてください。



それから暫く経って、私たちはお屋敷にいました。そこには主役のハヤテくん、ナギ、マリアさんだけでなく、私や親友の歩、千桜などのゆかりちゃんハウスのメンバーに加えて、愛歌さんや生徒会三人娘までもが勢揃いしていました。

何故彼女たちがここに居るのかというと、今日は文化祭だけでなくハヤテくんの誕生日でもあったのです。つまり今からハヤテくんの誕生日パーティーが開催されます。

リビングには既に苺のホールケーキが置かれていました。

『ハヤテ(綾崎)くん、お誕生日おめでとうー』

皆で拍手とクラッカーでハヤテくんを祝福して、少年は驚きながらも真っ赤に照れていました。まあ無理ありません。これまでにお祝いされた経験が皆無なのですから。

ケーキ、プレゼント、雑談と続いてパーティーは終わりました。

その一幕で、今朝鞆に入れた小包を、恋人への贈り物という定番も兼ねまして、数種類の石をあしら

ったプレスレットをハヤテくんに贈りました。勿論彼は喜んでくれましたし、笑顔を見た私も癒されました。これを選んでよかったです。

彼は親の借金を完済したとはいえ、金運に恵まれておらず傍から見ても不幸なので、金運に恵まれますように、何よりも幸せでいられますようにという私の願いを込めました。ということでの種類として、ラピスラズリ（幸運の守護）、シトリン（ストレスを癒す、仕事運、金運）、トパーズ（未来への希望）、ターコイズ（邪悪なものからの護身）などを選びました。

神様、私たちを結んでくださってありがとうございます。これからも私たちの関係が破綻せず永遠に続いていきますように、よろしく願います。

そしてハヤテくん、あなたを想う気持ちはこれからも変わりませんし、ずっと一緒にいたいのです。こんな私を守っててください。よろしく願います。

f i n .

桂流劍術指南ノ書 卷ノ五・秘伝奥義編

明日の明後日

五時三〇分。吐く息が白くなるほどの早朝に、綾崎ハヤテは白皇学院の敷地内を身を震わせながら歩いてきた。学生が出歩くには似つかわしくない時間帯だが、野暮用——で済めばいいのだが——のためにいつもよりも二時間早く屋敷を出たのだ。たったそれだけで、通い慣れた道の見慣れた風景からでも新鮮な雰囲気を感じ取れる。日々欠かさずに手を入れる屋敷の庭や、毎朝毎夕自転車で駆け抜ける通学路、日中の多くを過ごす教室が立ち並ぶ壮大な校舎に、我が学院のシンボルたる時計塔。そのどれもが、普段よりも何割増しかで引き締まって見えるのだ。少し湿っていて冷たい朝の空気がそうさせるのだろうか。

そんな柄にもないことを考えながら、足を進めて辿り着いたのは剣道場。朝の空気感のせいか、ありもしないのに鹿威しの音が聞こえてきそうである。

純和風の荘厳な佇まいの放つ威厳（三割増し）に無意味に委縮しつつ、ハヤテは戸を引いた。からか

らから、と乾いた音がして、次いで畳の匂いが鼻をくすぐる。いつもは大勢の部員で賑わっているけれど、今この瞬間においては水を打ったような静けさだけが場内を支配していた。そしてその真っ只中には、胴着に身を包んだ髪の毛の長い少女が座していた。しゃんと背筋を伸ばし、目を瞑って不動を貫くその様は、まさしく瞑想という言葉が打って付けてである。

靴を脱いで道場へ上がる。一步、二歩、と近付いて、三步目を踏んだところで少女——桂ヒナギクが顔を上げた。

「待っていたわ、ハヤテ君」

視線があつて、その瞳に流水の如き静かな決意を見つけて、ハヤテは緊張に身を震わせた。

◎

「五月とは言え、やっぱり朝はまだ冷え込むわねえ」

「はあ」

ずかずつ、とお茶を啜りながら話すヒナギクを見て、ハヤテは溜息を吐きたくなる。一体、何を一人で勝手に緊迫感を抱いていたのか。

「どうしたのハヤテ君、お茶、冷めちゃうわよ」

「そうですね、頂き…わ、すごい良い香り」

「でしょ？　パ…お義父さんのお土産なんだけど」

人前では決して口に出すことのない言葉が零れそうになる辺り、気が緩んでいるのだろう。すっかり和やかムードである。剣道場のど真ん中で——わざわざ電気ポットまで持ち込んで——お茶なんて如何なものかと思っただけれど「あ、おせんべいもあるわよ」なんて気軽に勧めてくるので気にしないことにした。しかも固焼き（醤油味、八枚入り二四〇円税抜き）である。どう考えても食べカスで置を汚してしまふと思うのだけれど、主将自らが景気よくバリバリ食べてるので、やっぱりこれも気にしないことにした。とは言え他の部員への罪悪感が無きにしても非ずというかありありなので、後で掃除をしておこう、と密やかな決意を固めてから煎餅を齧る。ざくざく、ぼりぼり。固焼きならはのがつんとした歯応えを楽しみながら焦がし醤油の芳ばしい香りを熱い緑茶で飲み下せば、ああ、日本人に生まれよかつたなあ、なんてささやかな幸せを感じずにはいられない。虫を鳴らし始めた小腹には——剣道場に呼び出された以上、身体を動かさずと思つて、朝食は普段より控えめにしていたのだ——煎餅の塩っ気と歯応えが与える満足感は心地よく、ハヤテはあつという間に二枚平らげてしまふ。お茶のおかわりを頂いて、三枚目に手を伸ばさずべきか否か悩んでいたそのとき、ヒナギクが口を開く。

「それで、今日呼び出した件なんだけれど」

いよいよ本題へと移るらしい。弛緩しきっていたそれまでとは打って変わって、今のヒナギクの表

情は固い決意と使命感で満ちている。このあたりの切り替えの速さが、彼女が白皇学院生徒会長たりえる理由のひとつなのだろう。空腹感に気を取られ、当初の緊張を忘れてしまっていた自分を、ハヤテは恥じた。

「是非、ハヤテ君に協力してほしいことがあるの」

「協力、ですか」

「ええ」

答えながら、ハヤテは心の中で胸を撫で下ろす。——彼女の只ならぬ雰囲気から、ひよっとすると決闘でも申し込まれるのではないかと危惧していたのだ。

「実はね」

そう言って、ヒナギクは少しだけ目を伏せた。三秒、四秒と待っても続く言葉はない。

休み時間の教室でも、アパートの自室でもなく、わざわざ剣道場に足を運ばせたからには、彼女の言う「協力してほしいこと」というのは剣道に関係すると見て間違いないだろう。しかし、なぜ剣道部員でもない自分に協力を要請するのか、ハヤテには分からなかった。

確かに一度、部活動見学という名目で剣道部の活動に参加したことがあるが、逆に言えばその程度の経験しかない。剣道素人と言っていいだろう。刀剣類の扱いには多少なりとも心得があるけれども、それは純粹な——命のやり取りにすら発展しかねない——戦闘のための技術である。一振りであ

るいは一突きで相手を仕留めるための、逆にそのような太刀筋から自らの身を守りかつ反撃に転じるための血生臭い剣術である。スポーツとして、あるいは日本の伝統武芸として必要とされる類のものではないはずだ。

ともすれば、そんな素人、あるいは畑違いの女人にすら縋らなければならぬほどに、彼女は追い詰められているのかもしれない。とは言え、完全無欠の完璧超人と称されるほどの豪傑である桂ヒナギクをそれほどまでに逼迫させるような事態にはそれこそ見当が付かないし、そんな状況下において自分なんかにできることは果たしてあるのだろうかと思えてしまう。

結論、彼女がこれからどんな依頼をしてくるのか、ハヤテには予測を立てることすらできないでいた。

だからこそ、たっぷり十数秒の間を取ってから続けられたヒナギクの言葉に、ハヤテは間の抜けた声を漏らさずにはいらなかった。

「実は私、二刀流を目指そうと思ってて」

「それは確かに大変な状——えっ、二刀流？　は？　え？」

突拍子もないヒナギクの告白に、ハヤテは混乱を隠せない。二刀流？　一体全体なんの話なんだ？　「だからね、ハヤテ君にはそのための特訓を手伝ってほしいのよ」

「え、ああ、なるほど。そういうことですか」

ようやく話の筋が見えてくる。理由はともかく、要は剣道で二刀流を試してみたいので、その特訓に付き合えということらしい。わざわざ部外者のハヤテに依頼したのは、試合で使えるかも分からない新技術の会得のために他の部員の貴重な練習時間を削る訳にはいかないという主将としての気遣いからだろう。

もちろん、ハヤテに断る理由はない。本来の職務である執事業の時間を圧迫されるようであれば考へ物だが、始業前の早朝であれば本職への影響は少ないだろう。主の登校に随伴できないことが少し残念だが、最近のカユラや千桜らと一緒に学校まで歩くことも多いし、休むと決めた日はハヤテやマリアが何を言っても結局休むので、大きな問題にはならないはずだ。強いて言うなら、やはり自身の剣道家としての技量が気掛かりだが、ヒナギクもそれは承知の上での依頼だろうし、逆を言えば多少の不得手であろうとハヤテならば特訓の相手として十分たりえると判断してのことだろう。その期待を無下にするのはハヤテにはできなかったし、またしたくもなかった。

「もちろん構いませんよ、僕でよろしければ是非」

「ありがとう！ ハヤテ君ならそう言ってくれると思ってたわ」

二つ返事で了承すると、ヒナギクは頬を綻ばせた。剣道の練習に付き合うだけでこの満面の笑顔が見られるなんてとんだ役得だな、と、このときのハヤテはまだそんな暢気なことしか考えていなかった。

「でも、どうしてまた二刀流なんて」

準備運動がてら、二〇分ほど軽く打ち合ってから的小休止。そういえば、と氣になって、ヒナギクが二刀流を志す理由を尋ねてみた。彼女ほどの実力であれば、わざわざ新技を開発せずとも全国制覇ですらそれほど困難ではないだろう。

「ほら、去年のGWでの一件で白桜を手に入れたじゃない」

「ああ、あのときの。そういえばあの一件以来、例の木刀——正宗でしたっけ、そっちはあんまり使っていないですね」

「そう！ まさにそれなのよ。白桜って切れ味も抜群だし切ると辺りに桜吹雪が舞うでしょ、それがすっごくかっこいいなって思っって、それで結構お気に入りなのよ。だけど正宗は正宗で愛着があるっていうか、やっぱり木刀だからなのかな、白桜はちょっと柄が固いっていうか、正宗の方が手に馴染む感じがするし使い勝手がいいのよね。それに」

え、何この人急に語り出したんですけど。あれですか、刀剣女子ってやつですかヒナギクさんそっち側の人間だったんですかそんな一面もあったんですねでも残念ながら僕両刀使って訳じゃないんでやっぱり二刀流の特訓には付き合えないかもしれないかもしれませんごめんなさい。

ヒナギクのおかしなテンションはとどまることを知らず、正宗と白桜、それぞれへの愛を滔々と語り続ける。一方ハヤテは思いがけず目にする事となつたヒナギクのマニアな一面に若干引きつつも圧倒され、しかし五分も経つころには然程興味のある話でもないことに気づき、お茶を淹れ直して煎餅にも手を伸ばした。三枚目である。

「——というわけで、正宗と白桜の両方を同時に、かつ自在に操ることができるようになる、というのが唯一の打開策というか、やっぱこれしかないな——って思うわけよ」

「あ、終わりました？」

ようやく話が二刀流云々のあたりまで戻ってきたとき、ハヤテは朝から数えて四杯目になるお茶をずずと啜っていた。煎餅を乗せた皿はついさきほどに空になったところだ。まるで話を聞いてない風体のハヤテに、ヒナギクは怒つた様子は見せず、けれど少しだけ拗ねたような口調で言う。

「ハヤテ君、ちゃんと聴いてた？」

「ええ、聴いてましたよ。つまり、正宗も白桜も同じくらい大切だから、いっぺんに使えるようになりたいってことですよね」

「そ。ざっくりまとめるとね」

九五%以上は聞いていなかったけれど、残りの5%未満からヒナギクの主張の要訣は容易に掴めた。ハヤテの答えに、ヒナギクはとりあえず満足した様子だった。

「しかし特訓と言っても、白桜と正宗の両方を武装したヒナギクさんの相手なんて、いくら僕でも務まらないですよ」

ハヤテの主張は尤もであった。鷲ノ宮家の秘宝たる木刀正宗はその使用者の潜在能力を極限まで引き上げるといふ。その能力の強大さはハヤテも身をもって知っているところである。正宗で武装したヒナギクと対峙したときには、ハヤテに戦う意思がなかったとはいえ、一刀両断の一手手前まで追い詰められたし、何よりハヤテ自身がその恩恵に与り絶体絶命の窮地を切り抜けたこともある。その状態ですらに白桜による身体能力強化が上乘せされるとなると、想像するだに恐ろしい。

「うーん、確かにハヤテ君だけだと少し危険かもね。白桜と正宗の相乗効果もあるだろうし」
「相乗効果、ですか」

言葉の意味をうまく飲み込めないハヤテに、ヒナギクが説明を加える。その内容を要約すると、以下のようになる。

まず、白桜はそれ自体が巨大な力の塊であることに加えて、その力を使用者の能力値に上乘せする。すなわち、白桜の使い手は白桜そのものの武器としての力と、白桜によって使い手自身の基本ステータスが底上げされるという二段階の強化を得ることになる。もちろん、相応の能力を使い手が持ち合わせていなければ、白桜からの力の供給に対応できず、自滅の道を進ることになるのだが。

正宗は使い手の能力を引き出し、白桜は自身の力を使い手に分け与える。一見すると互いに真逆の

効果を持つようにも思えるが、それゆえにお互いの能力を強め合う、共鳴とでもいってべき相乗効果が期待できる。

白桜の装備により使用者の基本ステータスそのものが底上げされるので、正宗によって引き出される能力の大きさ、いわば強化の倍率も上昇する。使用者の能力が高まるほど、白桜からは大きな力を引き出すことができるようになり、白桜の効果による基本ステータス強化が大きくなる。基本ステータスが高くなると正宗による強化倍率が高まり……といった具合に、さながら正宗と白桜がお互いに作用し合ってそれぞれの効果を強めているかのように、際限なく使用者の能力値を上昇させ続けることができるというのである。

その効果はヒナギクをして、「無敵」と言わしめた。いかにも負けず嫌いなヒナギクが好きそうな言葉であるが、実際にそのような効果が発現するなら文字通りこの世に敵などいなくなってしまうだろう。「なるほど」

ヒナギクの説明を聞いてハヤテは得心したように首を振る。そうしてから、ある可能性に気が付いた。

「ヒナギクさん」

「ん？」

「僕に死ねと言うんですか？」

ただでさえハヤテと拮抗しうるだけの戦闘力を保持するヒナギクに、ほとんど無制限の能力強化が施されるとなれば、身の危険を感じずにはいられない。それなりの修羅場は抜けてきたという自負はあるが、今度こそもうダメかもしれない。学院一の美少女とスポーツで汗を流すだなんて胸の高鳴る素敵な響き、まさしく絵に描いたような青春ドラマと言えようが、このまま練習を続ければハヤテが流すのはきつと汗ではなく血に違いない。

「んー、でもほら。ハヤテ君ってガ○ダムの生まれ変わりなんでしょ？ なら大丈夫よ、多分だけど」
「いやいや！ なんでそこで急に投げやりなんですか！？」 とうかその設定懐かしいですね！」
「それに方が一のことであっても、ギャグ漫画的描写っていうの？ 大怪我しても次のページでは治ってるみたいなの」

「大怪我どころじゃ済まない気しかしいですよ！ 後メタな発言はやめてください！」

「もしダメでもまたッガ○ダムに生まれ変わればいいだけの話だし」

「そもそも本当にヒナギクさんの言ったことが起こるんだたらガ○ダムどころかビッグ○ムだって一刃両断されかねないです！」

「ビッグ……？ まあ、物は試しって言うしとりあえずやってみましようよ。本当に危なそうだったらすぐにやめればいいし」

ハヤテの必死の説得も虚しく、ヒナギクは特訓——というより実験をやめる気はないらしい。気付

けば左手には正宗を携え、右手でどこからともなく白桜を召喚する。中段十字に構えてから、白桜を上段に振りかぶった。

「あ」

どこか間の抜けた声を漏らすヒナギク。次の瞬間、剣道場に大きな断裂が走った。ハヤテとヒナギクの間を斜めに駆けるようにして、剣道場が真っ二つに割れたのだ。数瞬遅れて、激しい耳鳴りがして、ハヤテは思わずその場に跪く。突然の出来事に狼狽しつつヒナギクの方を見る。それぞれ中段と上段に構えていたはずの正宗と白桜はどちらも無形の位に直っている。

「ハヤテくん」

今度は正宗を振りかぶって、ヒナギクが言う。その声は震えていて、何かを懸命にこらえているようだった。

「えっと、ヒナギ」

言い終えるより早く、剣道場にもう一本線が走った。また耳鳴りがして、ハヤテはおそらく事態を正しく理解した。剣道場を×の字に切断したこの断裂は、ヒナギクの手によるものであると。遅れて生じる耳鳴りは、超速の斬撃による空気の急激な振動のせいだろう。正宗と白桜の能力を単純に加算しただけでは、ここまで強力な斬撃は生じ得ない。すなわち、ヒナギクの言う共鳴効果が現実のものとなったのである。

「ちょ、これ、思ったより。やばいかも」

そしてヒナギク自身、それを御しきれていない。能力の高まりが、彼女のキャバシティを遥かに超えてしまっているのだ。ハヤテは血の気が引くのを感じ、今度こそ死を覚悟した。

短い間だったけど、お嬢様の執事になってから楽しいことも大変なこともたくさんあったなあ。どうせ今日死ぬのなら、昨日もっと丁寧到庭の手入れをしておけばよかったなあお嬢様ごめんなさい今日のお弁当はお嬢様の苦手な野菜が少し多めに入ってますでも色々試したのできつとお嬢様でも美味しく召し上がれますマリアさん後のことはお任せしますね買物頼まれましたけどいけなさそうですすみません後ずっと憧れていましたクラウスさんはまあいいかタマこれからはお前がお嬢様を守ってやるんだぞでも無暗に話さないよう気を付けろよシラヌイいたずらもいけどほどほどになタマとは仲良くやれよ神父さん僕がいらないからってマリアさんやお嬢様にあれこれしたら絶対許さないぞあの世から戻っても強制的に成仏させてやるからな。

「はやてくん……うまく、よけてね？」

両手を振り上げながら、ヒナギクは声を絞り出す。振り下ろすと、強大な爆裂音と閃光が空間を支配する。その日、白皇学院敷地内にある建造物のおおよそ四分の一が跡形もなく吹き飛んだ。

二日後。都内の大型病院の一角。ハヤテとヒナギクは二人揃って仲良く車椅子に乗せられていた。「まったく、各方面に誤魔化して説明するのも楽じゃないんですよ」

その前に立って二人にお説教を浴びせているのはハヤテの主たる三千院ナギの専属メイド、マリアである。かれこれ三〇分以上続いているわけではあるが、今は亡き剣道場で起きた大惨事の後始末で一昨日の朝から今日の昼頃まであちこち走り回っていたのだから無理もない。白皇学院はもちろん、政財界へのマリアの影響力は大きいが、規模が規模だけに火消しには相当骨が折れたことだろう。

ハヤテとヒナギクはしゅんと項垂れながらマリアのお叱りを黙って受けている。ハヤテはマリアと同僚であるが、頭が上がらない。また、ヒナギクにとっては白皇OGということに加えて元生徒会長という点でマリアは大先輩にあたる。そんな人物から長々と説教を食らい、流石のヒナギクも堪えていくようで、普段の覇気の片鱗も見られない。

「まあまあマリア、その辺にしておいてやれ。二人とも無事だっただけでよかったじゃないか」
そう言ってマリアを窘めるのは彼女、そしてハヤテの主人であるナギだった。

「賠償金だってほんの四〇億くらいだろ？ 私のポケットマネーでも足りるくらいじゃないか」
「それはそうですけど、でもいろんな人に迷惑も掛けましたし」

「ま、伊澄んちはともかく、確かに天王州家に借りを作ったのは癪と言えば癪だな」

そう、今回の被害がこの程度——と言っても甚大ではあるが——で済んだのは、驚ノ宮伊澄と天王州アテネの二人の力によるところが大きい。白皇の敷地内で尋常はない力の高まりを感じた二人は早急に剣道場まで駆け付け、ヒナギクが二本の神剣を完全に振り抜く寸でのところで術を放ったのだ。二人の奥義を持ってしてもヒナギクの放った破壊の波は相殺しきれなかったが、被害を白皇の敷地内に留めることができた。それがなければ、マリアの火消しにはまだまだ時間が掛かっただろうし、現場にいたハヤテとヒナギクは蒸発してしまっていたことだろう。

「でも二人ともバカじゃないんだし、これだけ大事になればそれだけで十分反省してるだろ。それをわざわざ一から指摘してやるのは野暮ってもんさ」

「もう、珍しくヒナギクさんより優位な立場にいるからって」

「べ、別にそんなんじゃないぞ！ ほら、まだ完治したわけじゃないし、あんまり長々話しても身体に響くといけないと思ってるさ！」

「なんか焦ってるように見えますけど。そういうことにおきましようか、二人が無事でよかったというのはその通りですし」

「そうだろうそうだろう！ では、二人ともゆっくり休むんだぞ」

「そうですね、ハヤテ君もヒナギクさんも普段から頑張り過ぎなくらいですし、この機会にゆっくり骨を休めてくださいな」

「うむ！ 何か必要なものがあつたらすぐ言えよ、ゲームでも漫画でもいくらでも持ってきてやるからな！」

そう言つてナギは右手をひらひらさせながら背を向け歩き出した。マリアは丁寧にお辞儀をしてから、小走りでナギを追う。ナギに追いついてからまた説教が始まったのか、ナギがややー喚き出す。通り掛かりの看護婦に「院内はお静かに」と注意され、どこか締まらない風体で二人は病院を後にした。

「ふうーっ」

車椅子に持たれながら、ハヤテは細長く息を吐く。

思わぬ形で休みをもらう形になってしまったが、マリアの言うようにせっかくだから十分に身体を休めよう。周囲に多大な迷惑を掛けたことを考えれば図々しいと思わないこともないが、自ら尻拭いをするようにも一通りことは済んでしまったようだし、何より身体のおちこちが痛んで十分には動けない。こんな形（なり）では執事の仕事だつてまともにこなせない。ここはナギとマリア、二人の厚意と言葉に甘えることにして、復帰してから馬車馬のように働こうと心に誓う。

「せっかくですのお言葉に甘えて久し振りのお休みを満喫することにしましょうか、と言つても身

体が思うように動きませんけど」

たはは、と笑いながら共犯者に声を掛ける。けれど、ヒナギクはまるで聞こえていない様子で、何やらブツブツと呟いている。

「私、なんて愚かだったのかしら。まさかあんなことになるなんて」

それを聞いて、ハヤテは胸の詰まる思いをした。あの桂ヒナギクが、こんなにも打ちのめされているとは思わなかった。思えば、彼女はいつも迷惑を掛けられる側の人間で、ハヤテ自身を含め友人たちが引き起こすトラブルを解決する役回りばかりしていた。それが今回は自らの安易な思い付きで、いつもとは逆に周囲に迷惑を掛ける側に回ってしまった。それはきっと、彼女のプライドに大きな傷を付けたことだろう。負けず嫌いの彼女にとっては、決して許されざることだったに違いない。

「ヒナギクさん、あの、うまく言えないですけど、」

「ああ、私ったらなんてことを。私の、私の」

きっと、彼女も疲れていたのだろう、とハヤテは思う。そうでなければ、あの聡明な桂ヒナギクが正宗と白桜の二刀流などという危険極まりない行為を実行に移すはずがない。

生徒会長兼剣道部主将というだけでその多忙さは一般生徒の五倍は下らないだろうに、周囲からの羨望や期待、嫉妬をすべて受け止めながら彼女はここまで邁進してきた。それに加えて彼女の周囲の人間はトラブルメーカー揃いで、何かにつけて彼女を頼る。彼女は彼女で、怒りさえすれ結局難なくト

ラブルを解決してしまうから、周りもそれに甘えてしまう。

ハヤテはこれまでの自分を猛省した。完璧超人だの、完全無欠の生徒会長様だのと持て囃されてはいるけれど、ヒナギクだって一人の、どこにだっている普通の女子高生なのだ。ただほかの人より少しだけ要領がよかったり、努力でできたりするだけの普通の女の子なのだ。それなのに、いつも頼ってばかり、甘えてばかり、追い詰めてばかりで。本当はもっと頼らせてあげなければいけなかった、甘えさせてあげなければいけなかったのだ。

今回の事故は、発端はヒナギクの突飛な発想にあるが、それは元を正せば、彼女をそんなことを考えさせるくらいに疲れさせてしまった自分たちにある。もちろんハヤテ一人だけのせいではないだろうが、それでもハヤテに責任の一端があることは間違えようのない事実だろう。もっと彼女の様子に気を配ってあげれば気付けたかもしれないのに。あのときだって、ヒナギクの熱弁を煎餅齧りながら聞き流すのではなく、もっと真摯に受け答えをしていれば、あんなことにはならなかったかもしれない。いや、そうに違いない、だってあのときのヒナギクは珍しくくらい興奮していたのだから。自らの趣味嗜好について、熱く語り合える仲間がいれば、それはストレスの発散となるだろう。満足するまでに徹底的に語り尽くすことで、あるいは二刀流の共鳴理論も机上の空論で終わらせていられたかもしれない。ああ、どうしてあのときもっとまじめに話を聴いてあげられなかったのか。自分の思慮のなさに全く辟易してしまう、もうあの事故の原因の大半は、いや全部が自分自身に

「私の愛が足りなかったばかりに!!」

「……………は？」

唐突なヒナギクの叫びに、ハヤテは我に帰る。

「もっと私が正宗と白桜のことを正しく理解できていればあのかだって制御できたはず。そう、もっと剣のことを考えてしっかり理解しなくちゃ。次は、そうね、正宗を右手に持って…いや、構えの問題かしら、正宗と白桜の能力を最大限生かしつつ、私が扱いやすい型となると」

「……………」

何やら物騒な考え事をしているヒナギクを見て、ハヤテは考えを改めた。事故の主犯は自分などではなかった。

車椅子をきこきこ動かして中庭まで出る。スマートフォンを取り出して、耳に当てる。

「もしもし、お嬢様ですか、ハヤテです。早速で申し訳ないんですけど、ちょっと読んでみたい漫画があつてですね」

退院後はずっと大変な事態になりそうだけれど。とりあえず現実から目を逸らし、久方振りの休みを満喫することにしました。

ハヤヒナ結婚後に待ち受ける超不幸 《評論》

双剣士

「ハヤテのごとく！」第四巻から登場する人気キャラ、桂ヒナギク。

主人公の同級生にして白皇学院生徒会長を務める彼女は、容姿端麗・文武両道・高い戦闘力を備えつつも世話焼き気質でツンデレと、読者の人気を集める要因を数多く持っている。戸惑いながらも主人公を好きになっていく過程が作中で丁寧に描かれたキャラであり、「幼少時に親に捨てられた記憶」という主人公と重なる一面すら備えている。

そしてそれでいながら、作中本編で主人公と恋仲になる可能性は皆無。それらしき契機は何度も出てくるものの、当人の性格とハヤテの気質、彼女たちを取り巻く状況などがマイナスに働き、西沢歩に裏切りの告白をした単行本一四巻から最新の五〇巻に至るまで恋愛面の進展は一切無し。まさしく「失われた一〇年」を体現していると言つていい存在である。筆者は一〇年ほど前に「桂ヒナギクはヒロイン予備軍ではなく、単なるネタキャラである」と某所で私見を表明してハヤテファンの一部から距離

を置かれたことがあるが、今にしてみればそれは「不愉快なひねくれ解釈」ではなく「多くの人が目をそらしていた残酷な未来予想図」であつたのだろう。

作中随一の人気キャラが延々と足踏みを繰り返すさまを見て、読者がもどかしく思うのは無理からぬところである。それゆえであるうか、ヒナギクがハヤテと恋仲になることをゴールとした「ハヤヒナ」と呼ばれるジャンルはハヤテ二次創作界では早くから人気筆頭であり、小説／コミック／イラストを含め幾多の名作が生み出されてきた。

なにを隠そう、あなた方がいま手に取っている電子書籍も、そうして生み出された創作物のひとつである。

ここで、筆者は一石を投じた。

ハヤテの人生観、ヒナギクの子供理論、そして三千院ナギや天王州アテネの存在とそれの超越……ハヤテとヒナギクが一緒になるための障害は原作中に明示されておりそれを乗り越えることが二次創作者の腕の見せ所であるわけだが、その後についてはどうであろうか？

あれだけの障害を乗り越えて二人で育んだ絆があるのだから、きっと未永く幸せに暮らしたに違いない……そう願うあまり思考停止をしていた面はなかつただろうか？

そんな簡単に済むわけではない。

シンデレラや白雪姫が王子様の後となったヒロインのその後を語らないように、ロミオとジュリエットが両者の自殺という形で幕を引かざるを得なかったように……障害の克服を愛の成就と同一視したカップルのその後については、世間ではあえて触れないことが不文律とされている。

本考察ではあえて、その点に踏み込んでみようと思う。結論を最初に述べると以下になる。

【ハヤテとヒナギクの新婚生活、崩壊必至】

紙面の都合もあるので、本稿ではその理由のうち三つを述べさせていただく。

【1】 厄介な親族に対する態度の相違

綾崎ハヤテは、世間はおろか実の息子に対しても犯罪行為をためらわない猛毒の両親を抱えている。桂ヒナギクも金遣いが荒くお世辞にも生徒の模範とは言えない姉を抱えている。二人が結婚すると言ふことは、そういった厄介な親族とも縁を結ばざるを得ないと言ふことである。

もっともそれ自体は二人の破局要因にはならない。お互いがそういう境遇であることを二人は相手に隠していないし、基本的に真面目で優秀である彼らはヒモの二く三人を抱えたくらいで赤貧生活に落ちることもないだろう。

問題は厄介な親族の存在自体ではなく、それに対する二人の態度の相違である。

「あなたの……ご両親のことなんだけど……ご両親が借金を押しつけていなくなった時……どう思った？」

「へ？ いや、どうって……ヒドい親だなって……子供捨てるなんて人として最低だし……こんなろくでなし他にいないって言うか……」

「……」

「ま、人間失格ですよ。人間……」

「理由が!!」

「……? へ?」

「理由があったんじゃないかって……思わなかった?」

※ 単行本九巻より抜粋

綾崎ハヤテは既に両親のことを切り捨てている。兄のことは慕っているものの、第一巻で臓器を売り飛ばされそうになった時も兄の名を呼んだりはしない。自分は天涯孤独で頼れる親族は誰も居ないというのがハヤテの人生観であり、だからこそ借金のカタに四〇年の労働を余儀なくされても潮見高

校からの転校を勝手に決められても、さほど抵抗することなく受け入れている。また親しい友人が来て、その友人の親族に気を遣ったりはしない（雪路しかり虎鉄しかり）。ハヤテはおそらく結婚後に金欠親族がすり寄ってきてても、黙って逃げ出したり通報できるくらいに心が冷めているのであろう。

桂ヒナギクはそうではない。自分を捨てた両親に会いたい許したいと心のどこかで思っており、さんざん迷惑を掛けられている姉・雪路のことも怒鳴ったりはするものの見捨てることなど決して出来ないタイプである。なのでヒナギクは自分たちの結婚式に双方の親を当然呼びたがるだろうし、ハヤテが「あんな親は呼ばなくていい」と言ったとしてもハヤテ両親が連絡を取ってきたらこっそり連絡先と結婚式会場を教えてしまう、そういう一縷の望みを捨てきれない性格の持ち主である。

こんな二人が結婚したらどうなるか？

「なんであいつらを呼んだんだよ!? 僕の親には連絡するなって言っただろ？」

「ごめんなさい、でも一生に一度のことだし、ご両親も反省してるみたいだったから……」

「あの両親が反省なんかするもんか！ これじゃ入籍後に僕らが姿を消しても、ヒナギクさんのご両親を辿ってあの親どもは近づいてくるぞ！ なんてことしてくれたんだよ！」

「で、でも会いたくても会えない親だって居るんだし……自分の息子に冷たくあしらわれて、きつとご両親も寂しいんじゃないかって思うのよ。それに歳を取ったらご両親だって丸くなって、お金より

安定を求めるようになるかも知れないし」

「あの親が改心なんかするもんか！ 天地神明に誓ってあり得ない！」

お互いのことなら理解も妥協もできるが、この点だけは譲れない。恋人から結婚に進むにあたり、こういう両者の相違が致命傷になる確率は決して低くないと思われるのである。

【2】 幸運の有無に伴う人生観の相違

綾崎ハヤテの人生は不運の連続である。まるで死神に魅入られたかのような運のなさは原作中で何度も描写されている。それでもめげずに自転車便やマンガ投稿で生活費を稼ぎ、三千院家に務めてからは老練の執事長を空気化するほどの高い執事スキルを発揮。いわば彼は逆境を通じて自らを磨き、自分の立ち位置を築き上げてきたと言えるだろう。なので彼は「出来ない子」に優しい。勉強の出来ない瀬川泉にしてもマンガの下手な三千院ナギにしても、ハヤテは腐ることなく手助けやアドバイスをしている（当人に有効かどうかはともかく）。雲の上の存在に見えた現役アイドル・水蓮寺ルカがお弁当をねだったり自転車に乗れず泣きついてきた時にも、忙しい中で時間を作って対応している。

一方の桂ヒナギクは幸運に包まれて生きてきた少女である。幼少期に両親の蒸発という悲劇があったにせよ、面倒見の良い姉と養父母、順風満帆の学業と剣道部、一年生にして生徒会長を務めるほどの人望、宝くじであっさり一〇万円を当てスケルトントランプでは配られた時点でロイヤルストレートフラッシュという爆運……絶え間ない努力と強運で何もかも手に入れてきたと言っている。あえて言うなら「好きな人に気づいてもらえない」が貴重な挫折経験になるはずだったのだが……本稿ではヒナギクの恋心が成就したという前提に立つので、これも成功経験にカウントされることになるだろう。

この通り何から何まで対照的な二人は、普通なら嫉妬心や自嘲心が邪魔をして親密になれないことが多いのだが、幸いにして原作中の二人にそういった感情の発露はない。生き方が異なるからと言って自分のやり方を押しつける傲慢さもない。なので恋人であるうちは、この二人に大きな破綻は訪れないだろう。

問題は、彼らが人生を賭けた共同作業……子育てをする段階に直面した時である。努力すればどこまでも高みに登れると信じている母親と、頑張っても出来ないことはあり状況に応じて身を処すことが肝要と考える父親。教育方針を巡って言い争う二人の姿が今から目に浮かぶようである。

「三〇点って、なんなのこの点数！ 満点を取れとは言わないけど、基礎をしっかりとやれば七〇点は

取れるはずよ？ しっかり覚えるまで寝かせませんからね！」

「無茶言うなよヒナギク。誰にだって得手不得手はあるし、将来そっちに進むとは限らないんだから。それより身体を壊さないことが大事だろ」

「もう、そうやって甘やかすからこの子が調子に乗るのよ！ 一日ほんの五〜六時間程度の勉強するだけなんだから！」

「まま、こわい〜」

「よしよし、大丈夫だからもう寝なさい……最期に笑うのは強いやつでも賢いやつでもない、ひたむきでマジメなやつなんだからな」

「ひたむきでマジメに続けていたら、強くも賢くもなれるのよ！ 真面目さは目的じゃなくて過程！ 子供に変なこと教えないで！」

母親の聡明さと強運を子供が受け継いでいればまだしも、そうでなかったら虐待に直結しかねない地獄絵図である。

しかももし子供が二人で、一方が幸運を、一方が不運を受け継いでいたとしたら……家庭分裂に至る日も待ったなしではないだろうか。

雪路がヒナギクに対して心配しているのは、こういう融通の効かなさなのではないかと筆者は想像

する次第である。

【3】 壊滅的なネーミングセンスのなさ

最後に挙げるのは、ヒナギクの数少ない欠点のひとつ「ネーミングセンスのなさ」である。ここまでハヤテとヒナギクの噛み合わない面を強調してきたが、この点に関してだけは両者は同レベル。二人揃って「アーたん」である。

通常ならこれは愛嬌の範疇に過ぎない。千桜のことをハル子と呼ぼうがタヌキのことをポコ吉と呼ぼうが、周囲にヒソヒソされることはあっても二人の仲に亀裂は入らない。だが結婚して子供を授かる段階になると、この欠点が急浮上することになる。さすがにペットのような名付け方はしないとしても……。

「ハヤ子」

「ハヤギク」

「ユキテ」

「ヒナジ」

「ヒナ太」

キラキラネームとは次元の異なる惨状が今から目に浮かぶようである。ヒナママは喜々として正統派キラキラネームを提案してきそうだし、イクサ兄はアルファベットを逆さまにした名前を言い出しかねない。要はブレイキ役になる年長者が彼らには居ないのだ。迷惑なのは当の子供たちである。センズゼロの名前をつけられて、一生それを背負っていかなくてはならないのだから……。

ん？ ヒナ太？ ひなた？

なんとということでしょう。

止まり木の前身たる「ひなたのゆめ」の名前がここで出てくるとは！

そうするとあれか、「ひなたのゆめ」がハヤヒナ小説にあふれて小説掲示板がメインとサブに分裂する事態にまでなったのは、この未来図を暗示していたのか？ 二人の子供であるヒナ太が自分の出生を確認し自信を取り戻そうと、未来時空からやってきて当時のハヤテファンの脳に働きかけハヤヒナ小説を量産させたのが「ひなたのゆめ」サブ小説掲示板が隆盛を誇ったあの時代の真相だったのだから

うか？

ハヤヒナの未来を考察していたつもりが、未来人まで巻き込んだ陰謀の一端を明かすことになるとうとは！これは評論など書いている場合ではない、急いで構想をまとめてムーに投稿しなくては！

おっ、何やらテレパシーで新しいメッセージが……。

「ネーミングセンス無いのはハヤテでもヒナギクでもなくて、この文章の筆者本人じゃね？」

ちゃんちゃん。

謎解きはデートのあとで!?

どうぶん

「見たい映画に誘われたからって、好きな人とでなかったら、私は観に来ないわよ」

ハヤテとヒナギクが某テーマパークを訪れ、デート気分で盛り上がったその夜。

原作では、このセリフは隣を通過した電車の音にかき消された。

しかし本作品においては、その電車がトラブルで停止しており、ハヤテの耳にはっきりと届いた。

「ほ……本当ですか」ハヤテの直截的な反応にヒナギクは慌てた。さっきの不用意な発言は、聞きよ
うによっては告白だということに気付いた。

とまどいながらも期待に満ちた目がヒナギクを凝視している。

ヒナギクは混乱した。どうすべきか。今、首を縦に振ればきつと……。しかし、余計なことが頭を
かすめた。

（これじゃ私の方が告白したみたいじゃないの）

「ご、誤解しないでよ。あくまでお友達としてね」

その夜、ヒナギクは机の上で、腕に顔を埋めていた。

（意気地なし……。何よ、ひとこと言われたくらいであっさりど）

「ヒナ、お金貸してえ」傷心の乙女の部屋に、前触れもなく飛び込んできたのは雪路だった。

「昨日も今朝も断ったばかりじゃないの」

「こういうことは諦めちゃダメなのよ。繰り返せば、きっと相手に熱意が……」湧きあがる殺意は、すぐに脱力に変わった。

「なんでハヤテ君にはこの一万分の一の熱意がないのかしら……」ため息と共に呟いた。もう相手にする気にもならない。

「相手を責める前にまず自分から。ヒナはいつもそうじゃなかったっけ」聞こえてきた声には意外なほど力がこもっていた。

「よ、余計なお世話よ」

不貞腐れたようにベッドに寝そべったヒナギクの背中にもう一度声が届いた。

「ヒナ、人生ってさ、失敗してもいいのよ。カッコ悪くても結果オーライってこともあるし、どんなにブザマでも一〇年も経てば酒の肴になるから」

(そんなだからお姉ちゃんは……)

しかし今の自分はどうかのだ。二人で楽しんで盛り上がって、いい雰囲気にもなって、しかし最後は何でこんなことになっているのか。

(明日……ハヤテ君に伝えようか。あれは嘘だって)

しかし、嘘だとしたら、本当のことは何なのか……。そもそも、何でそんなカッコ悪い真似を……

どれだけの間、堂々巡りを繰り返して悶々としていたのか。いつの間にか姉の姿は消えていた。まだ正解はわからない。だが、一つだけ気付いたこと。

(この方がよっぽどカッコ悪いわよ、きっと。ブザマに振られるよりも)

ヒナギクは体を起こした。居ても立ってもいられなくなった。

ヒナギクはスマホを取り出し、ハヤテにメールを送った。

「会って話したいことがあるの」

返事はすぐに届いた。

「僕もそうです。今からお家に行ってもいいですか」

ハヤテはスマホを握りしめて駆けていた。その視線の先に浮かぶものは、今日見たばかりのヒナギク
ク
の笑顔だった。

extra nightmare

春樹咲良

conduction

きっかけは大したことではなかったはずだが、もうよく覚えていない。どうしてこういう状況になっ
ているのか、それを語る必要性はないというか、正直考えている余裕がない。

とりあえず、今の状況を述べるなら、私は今、好きな男の子と手を握り合っている。お互いに強く、
強く握りしめている。

——右手と右手。握りあったお互いの拳を挟んで、真剣な眼差しが、火花を散らさんばかりにぶつか
っている。

「よし、お互い準備はいいかな？ レディー……」



この日も私は、生徒会長の執務室であるところのこの部屋に顔を出しても、案の定手伝おうという素振りさえ見せない三人の役員たちの存在を盛大に無視して、いつもどおり仕事を片付けていた。この三人ときたら、大体において、何をするにしても私が迷惑を被る結果になりがちであるが、今日は何を思ったか、三人で腕相撲に興じていたらしい。

「んんん！！ ぐぐぐ……！！」

「なんだ、泉、それでも力を入れているつもりなのか」

顔を真っ赤にしながらかんでいる泉に、それとは対照的な、平然とした顔で理沙が声をかける。

「これなら両手でかかってきても勝てるんじゃないか」

「んんん！！ んんん！！」

と、さらに泉をおちよくる理沙の声は、必死になっている泉の耳にはどうやら入っていない様子だ。今日やるべき仕事にほぼ目処が付いたので、気まぐれに三人が遊んでいるところに私も近づいていく。

「はっはっは、ペンより重たいものが持てないというやつだな。は……は、ハックション！」
バシーンという音とともに、泉の手の甲が机に叩きつけられた。理沙がくしゃみをした拍子に、呆気なく勝負がついてしまった。

「いったい！ ひどいよりサちん！」

涙目で泉が抗議の声を上げる。それにしてもひどい決着の仕方である。

「お、どうしたヒナ、お仕事はもう片付けちゃったのか」

近づいてきた私に気づいた美希が言った。

「そういうセリフは、せめて手伝おうという姿勢を見せてから言ってくれるかしら」

「気持ちはあるんだけどさ、なかなか伝わらないもので」

「伝えないからでしょう」

思っているだけで気持ちが伝わるなら苦労はない。色々と、苦労はしていないことだろう——まったく。

泉をなだめて（からかって）いた理沙が私の方を見て言う。

「ヒナも混ざるか？ じゃあ次は美希とヒナでやるか」

「いやだよ、手首から先がなくなっちゃうだろ」

「誰が握カオバケよ」

「おや、言っていないのにどうして思ったことが伝わったんだ」

「なんでずってえー？」

完全におちよくられている。本当に手を握りつぶしてやるうかという気持ちをもと抑えようと、一人拳を握りしめているところに、

「失礼しますー」

という声が飛び込んできた。そして、思わずそのまま振り向いた私の姿を見て、その人は、というかハヤテ君は

「って、うわ、何ですかヒナギクさん。僕、何か殴られるようなことしましたっけ？」
などと声を上げた。

「えっ、ち、違いわよ！ 誤解よ、誤解！」

「なんとハヤ太君、五回も殴られるようなことを……！」

「さすがハヤ太君、行く先々で不幸を引き寄せる天才だな」

美希と理沙がさらに誤解を加速させようとしているのを見て（本当に五回くらい殴ってやるうか）、ハヤテ君の方は逆に察してくれたらしい。話題をさっさと切り替えて、

「それはさておき、皆さん、何かさかっていたんですか？」

と聞いてきた。

「ああ、いやちょっと、腕相撲をね——」

そう答えたところで、私としては何となく予感していたのだが（言っていないのに伝わるのは、この場合、経験則に基づく第六感だと思う）、

「そうだ、どうせならハヤテ君とヒナで勝負をすればいいんじゃないか」

という理沙の提案が飛び出した。

「え、僕ですか？」



状況だけ見れば、確かに好きな男の子に手を握ってもらっている。もらっているのだが……

「所詮、血塗られた道か……」

「え、何か言いましたか、ヒナギクさん？」

「……何でもないわ」

若干困惑の表情を浮かべるハヤテ君を見て、何となく、彼の考えているようなことが読めた気がした。そこでふと、私の生来の負けず嫌いが湧き上がってきた。

「言っておくけど、負けるつもりはないわよ。全力で来なさいよ？ ハヤテ君も手加減なんてしたら、

本当に殴っちゃわよ？」

「て、手加減なんてしませんよ……」

「何なら、何か賭けましょうか。負けた方が勝った方の言うことを聞く、なんてどう？」

負けず嫌いな私もここまで来ると向こう見ずの域に両足から飛び込んでるように思えるが、この時の私は、そんな冷静な判断ができる状況ではなかった。

そう、言ってしまうえば舞い上がってしまったのかもしれない。手を握られているという状況に。

「い、いいんですか？」

「私を見くびらないで」

こうなったら後には引けない。開始の合図をするために理沙が声をかける。

「よし、お互い準備はいいかな？ レディー……」

「GO！」の合図と共に、一気に力を込める。左足を踏み込み、体重を乗せて全身で相手の腕を左側に倒しにかかる。ハヤテ君が身体ごと傾き、彼の手の甲が弧を描いて机に向かっていく。

——私は、勝ちたかったのだろうか。冷静になって振り返ってみても、それはよく分からない。

「おっ！！」

三人の歓声が上がったのも耳に入らないまま、私はなおも力を込め続けていた。

「ぐ……………っ！」

一瞬で決めるつもりだった。実際、周りで見ていた三人には一気に勝負がついたように見えたのだろうと思う。しかし、ハヤテ君の手の甲は、机からわずか二センチというところで止まっていた。

そこから、どれだけ力を込めても、彼の腕はビクともしない。

「このお……………」

段々と、力を消耗していくのを感じる。それにあわせて、私の手を握る彼の手の力強さが、その熱さが伝わってくるのを感じた。

そして、今度は徐々に、徐々に、自分の意志に反して手が引き上げられていく。スタート位置の高さまで戻されると、そこで止まることもなくそのまま引き倒されていく。

「んんく！！」

先程の泉のような声を上げながら、私はなおも抵抗を試みる。

ふと、ハヤテさんと目が合った。真剣な眼差しが、私の両目を捉えた。そんな目で見つめられたら……卑怯だ、力が抜けてしまうじゃない。

「本気でかかってこい」と言ったのは自分のくせに、そんなことを思う私がいた。

……………ばたん。

そして、思いのほか静かな音で、勝負は決した。



「……それで、何をお望みななの？」

「いやぁ、そんな脅すような目で見られても……」

負けた側の態度ではないことは分かっているながらも、こんな振る舞いをしてしまうのは、負けず嫌いだからというだけではないのだろう。

ちなみに、観客だった三人は、呼ばれていた補習をサボっていたらしく、私とハヤテ君の勝負が終わった直後に、お姉ちゃんに連行されていった。

「まあ、正直あんまり思いつかないのですが、そうですね……」

元々、自分が吹っかけた条件なのだが、ハヤテ君に限って、私に無茶な要求をすることはないだろうという、安心感のようなものがあつたことも否定できない。

「じゃあ、今度どんぐりで、コーヒーを奢ってください」

「……いいけど、そんなのでいいの？」

「ええ、そんなのがいいんです。僕にはそれくらいで」
「……いいわ。わかった」

あなたのためなら、特別な一杯を用意しよう。

エピローグ ―それでも花は咲いている―

ロッキー・ラックーン

こんにちは、綾崎ハヤテです。今日は特になんでもない日曜日……のはずでした。お嬢様が「今日こそ料理をしてやるゾ!」と言い出すまでは。アシスタントにアーたんを引き連れて、アパートの共有キッチンを立ち入り禁止にしています。なにやら、豆腐を使って何かを作っているみたいですね。

「よおーし、いよいよ味付けに入るぞ。今日は和食の伝統『さしすせそ』にちなんでいこうと思う。名づけて『三千院丼』だ!」

「なるほど。伝統的な方法にそえば、たとえナーちゃんだとしてもハズレの無い料理が出来るという訳ですわね!」

「うーん、アーちゃん相変わらず手厳しいな……!」

二人のやり取りはともかく、豆腐にさしすせそならハズレが無さそうだぞ！ これはちょっと期待が出来るのではないでしょうか？ あ、ちなみに二人の様子はマリアさんが用意してくれた隠しカメラから観察しています。

『さ』は砂糖だな。誰でも知ってるぞ！（サーツ）

「甘いのは私も大好きですわ」

豆腐に砂糖……まあしょうゆとかに溶かすならまだ大丈夫だ。大丈夫のはずだぞ。

『し』はしょうゆ。これも常識だな！（ドボドボ）

「おしょうゆは日本人の心ですわね」

え……？ 普段の博識っぷりはどこにいったんですか？ でも砂糖にしょうゆならまだ全然セーフです。結果オーライ！

『す』は……お酢か。あんまり得意じゃないんだよなあ（ピチョン）

「私もですわ……。まあ、アクセントにちよつとだけでも大丈夫ですわよ」

おお！ これもナイス判断。お酢を使いこなすのはかなり難しいから入れないでも良いくらいです。なんかいつもと違って期待が持ててきたぞお。

「せ……ってなんだ？ 思い出せん」

『せ』はおしょうゆですわよ。昔は『せうゆ』と書いたらしいですわ」

「なるほどな。さすがアーちゃんだ！（ドボドボ）」

あの、さっきしょうゆって入れてましたよね……？

『そ』はソースだよな。たっぷり入れるぞ〜」

「お待ちなさい！」

「なんだなんだ？」

おお、アーたんナイス！ 『そ』は割とよく間違えられるけど味噌なんですよね。砂糖醤油と味噌な

ら豆腐との相性は全然アリで……

「これは和食ですわよ。ソースはソースでもソイ・ソースを使うべきですわ」

「ああ〜！ そうだよな。ソイ・ソース……つまりはしょうゆだな。任せておけ！（ドボドボドボドボドボ）」

絶句。あと入れすぎです。

「なあアーちゃん。なんかしょうゆ多くないか？」

「そりゃあ日本人の心ですから。多くて当然ですわ！」

「なるほど！ さすがものしりアーちゃんだ」

「エッヘン！ ですわ」



「うーん、これはマズイ(ですわ)ー！」

まあ、当然の結果ですよ。僕の前にも「三千院井」が鍋ごと置かれています…。

「んもう、食べ物で遊んじゃダメでしょ！」

ここで現れるは僕の恋人、桂ヒナギク。外出で遅れての登場となりました。ここからお嬢様とアータんにしっかりとアドバイスして道を正してくれる事に期待を…。

「これ、ちょっと持ってくわね♪」

と、僕のモノローグが終わる間もなく三千院井のもとがたっぷり入った鍋をキッチンに持って行きました。まさか捨てるなんて事は無いでしょうけど…。

「ハイどうぞ♪」

「ウマイ(ですわ)！」

三千院井の面影を残しつつも、悪魔のしよっぱさがまろやかな味わいに大变身。豆腐がしよゆを、しよゆが豆腐を引き立てあう見事なハーモニー。ご飯が何杯でも食べられちゃいそうなウマさです！

「うん、これは本当に美味しいです！」

「おいハヤテ！ 『これは本当に』ってどーゆー事だ！？」

「んもう、ケンカせずに食べなさい！」

なんの変哲も無い日曜日。お嬢様やアーたんとお賑やかなひととき、ヒナと一緒に食べるごはん。この日常がたまらなく愛おしい。



「ヒナ、今日はありがとう。すっごく美味しかったです」

「それは良かったわね」

後片付けを終えて、縁側で月を見ながらひと休み。僕が淹れた紅茶をヒナは美味しそうに飲んでくれる。

「ナギもアリスも、もう少し食べ物を大事に扱ってくれないものかしらね？」

「いえいえ、お二人とも以前と比べてかなり成長されましたよ」

「そうかしら？」

あの二人の……特にアータんの事を話す時のヒナは本当に嬉しそう。この静かなひと時もまた僕の大好きなものだ。

「ちょっと改まった話を聞いてもらってもいいですか？」

「どうしたの？ ホントに改まっちゃって……。もちろんいいけど」

前々からヒナに言おうと思っていた事、それをこの場でつい言ってしまおうと決意した。決めたのは食事の後片付けの時だ。

「このアパートも、学校も、僕の周りみんなに今の感じが続くといいな……。ってというのが僕の夢なんです」

『今の感じ』？ ……変わらないっていう事かしら？』

今の感じ……。これを伝えるように表現するのはすごく難しい。もう少し噛み砕いてみよう。

「いえ、人が変わっていくのは自然な事です。時の流れの中で色々な事が変わっていても、みんなの中の誰にも嫌な事が起こらず、誰ひとり欠けて欲しくない……。と言えば伝わりますかね？」

「……うん。なんとなく」

「でも、そのために僕がする事なんて無いし、欠けて欲しくないものは増えていくばかりです」

「そうかもしれないわね」

僕の言いたい事を理解しようとヒナも真面目に聞いてくれる。これも大事だけど、一番聞いて欲しいのはもう少し先の話。

「ただ、ひとつだけ僕の方で成し遂げたい事の中にはあります。一番言いたいのはそれなんです」

「へえ。私がそれを聞いても良いのかしら？」

「ええ、もちろん。笑わないで聞いてくださいいね？」

「うん」

多分、次の言葉は一生に一度しか言わないものだ。だから絶対に忘れる事の無いように、大事に大事に言いたいと思う。

「ヒナ、僕と結婚してください！」

「へ？」

意外な反応。僕の言葉が急すぎて、ヒナの頭がついていけない？

「アレ、聞こえましたか？ もう一回言いましょうか？」

「いや、いいわ。……やっぱりもう一回言って！」

早くも前言撤回。二度目のプロポーズ。「一生に一度」というよりは、「一人に対してしか言う事が無い」と表現した方が正しかったみたいだ。

「わかりました。……僕と「オイオイオイ！ちょっと待つのだ！」

「たいしたものですわね。私たちを差し置いて二人でイチャイチャと……」

「お、お嬢様！ アーたん！」

この静かな空気の中に割り込んでくる暴走機関車のお二人。ああ、やっぱりこうなるんですね。

「なんだ、私たちに見られてちゃ嫌だって言うのか？」

「いえ、そーゆー訳では……あるんですけど」

「私たちは立会人に過ぎません。遠慮する必要はありませんわ」

なんの悪びれも無く僕のプロポーズを見届けようというお二人。でも、これも僕の好きな「今の感じ」そのものだ。

「ハヤテ、まだ？」

「わかりました、言いますよ。では……ゴホン。僕と……」

きっとこの「今の感じ」をずっとずっと繰り返して過ごして行くのだと思う。そこにはいつだって花が咲いていて、いつだって僕に優しく笑いかけてくれるに違いない。

僕のしあわせはここにある。

【おわり】

ヒナギク様は告らせたい

双剣士

上流階級子弟の通う超名門校として名高い白皇学院。

次代の日本を背負う超エリートたちが集うその学び舎は、校舎や内装のみならず立地も広さも超一流。通う生徒たちは文武両道、質実剛健を旨として費用に糸目をつけぬ帝王教育を施され、その出身というだけで社交界から一目をおかれるほど。

そんな白皇学院のもっとも高い場所は、通称ガーデンゲートと呼ばれる時計塔。その最上階にある生徒会室で、その主たる生徒会長……桂ヒナギクは早朝から黙々と執務をこなしていた。がらんと寒々しい生徒会室には彼女のほかに誰もいない。

……どことなく前作オープンングを想起させる冒頭シーンだが、事態はここから動きだす。軽快なチャイムの音にヒナギクが顔を上げると、到着したエレベータから生徒会役員……瀬川泉、花菱美希、朝風理沙の三人が笑顔とともに生徒会室に駆け込んできたのだ。そして連れてきた少年を前へと押し

出した理沙は、朝の挨拶もなしに高々と宣言したのだった。

「さあハヤ太君、今すぐヒナに愛の告白をするんだ！」

……行儀知らずの乱入者たちを一喝で黙らせてから、ヒナギクが理沙たちから聞き出した事情によると。

そもそもの発端は理沙たちの所属する動画研究部が、動画甲子園(単行本四四巻第七話)に出場したことが始まりらしい。主催が泉の父親と言うこともあってか、並み居るユーザーたちを差し置いて準優勝という好成绩を収めた理沙たちであったが……賞状と盾を受け取って終了、という訳には残念ながら行かなかった。

上位入賞者にはエキシビジョンとして取っておきの動画をUPする義務があり、理沙たちに寄せられた視聴者からの要望は「ニャンコはどうでもいいから二回戦に出てきた女の子をもう一度出せ」という声が圧倒的だったそうなのだ。

「二回戦に出てきた女の子って？」

「いや、そのお、つまり……」

決る理沙たちに肖像権とプライバシーの基本をみっちり叩き込む約束をしてから続きを促す。と

にかくそんなわけでヒナギクの動画が必要になった三人は一計を案じ、ハヤテをつれて生徒会室に突入する挙に出たと言うのだ。

「まったくもう……それならそうと、なんで相談に来ないわけ？」

「我々は映研じゃない、動画研究部だぞ？ シナリオ通りにやっても面白くないだろう！ その点ヒナならサプライズを仕掛けても、期待通りのリアクションをしてくれるんじゃないかと」

「いったい何を私に期待しているのよ!？」

返事はなくとも理沙たちの期待していることは分かる。怒り狂ったヒナギクがハヤテを時計台の外へと弾き飛ばすような鮮烈動画を撮りたいのだろう。まったく失礼しちゃうわ、人を何だと思ってるのかしら……と憤ったヒナギクは次の瞬間、そう期待されるに十分すぎる過去の自分の振舞いに気づいて愕然とした。

《私ってば、いつも怒ってばかりで……優しい態度なんか全然とってなかったもんな……》

冷静に考えてみれば、演技とはいえ好きな男の子が自分に告白してくれるのだ。ハヤテからの告白を絶対条件にしているヒナギクにしてみたら願ってもない状況ではないか。これを機会にカップル成立とまでは行かなくても、せめて自分が彼を嫌ってはいないという気持ちくらいは伝えられるのではないか。

というか一つ屋根の下に暮らしていても二人の関係を一步も先に進められないヒナギクにとって、こんな美味しいシチュエーションを見過ごす手があるうか、いや無い！

「ヒナにバレたんじゃ仕方ないな、別のネタを探そう」

「もう勝ち進む必要ないんだもんな。視聴者には悪いけど、またニャンコの動画で誤魔化そう」

「……ちょっと待ちなさい、あなたたち」

背を向けてトボトボと帰ろうとする理沙たちを、ヒナギクは満面の笑みで呼び止めたのだった。

「と、友達が困ってるなら仕方ないわよね。どうしても言うんなら協力してあげても良いわよ」



かくして白皇学院生徒会長の全面協力のもと、エキシビジョン動画の撮影が始まる……はずだったのだが。

「えっとお、それじゃあヒナギクさん、どうか僕とお付き合いを……」

「カット！ 全然感情が伝わってこないわ、やり直し！」

「す、すみません。それじゃ……ヒナギクさん、僕とお茶でも一杯どうですか？」

「カットカット！ になよその下手くそなナンパは!?! もっと誠意を込めなさいよ、誠意を！」

「せ、誠意って……僕いま五〇〇円しか持ってないんですが……」

「お金じゃなああい!! お姉ちゃんならともかく、私にそんな手は通用しないわよ!」

この主演女優、ノリノリである!

始終こんな調子で、ヒナギクはハヤテの告白にダメ出しをしまくるのだった。彼女にしてみれば演技とはいえ好きな人からの告白、思いつきり素敵でロマンチックなものを望むのは無理からぬところ。まして映像に残るといふなら尚更……と秘かに思っている行動な訳だが、もともとネタ動画を撮るだけのつもりだった理沙たちにとっては計算違いも甚だしい。

「な、なあヒナ、そこまでしなくてもいいんじゃないか? 別に映画を撮りたいわけじゃなし……」

「甘いわよ理沙。仮にもコンテスト準優勝チームの作る動画でしょう、学芸会レベルじゃ名前を落とすわよ」

「そりゃ完全主義者のヒナにとってはそうかもだけど……私たちはそういうの、別に気にしないし」

「目標を下げたらいつの間にか墮ちていくばかりなんだから! 飽くなき向上を目指し研鑽を積み重ねてこそ、本当の意味での明日が来るのよ!」

「お、おう……」

修造化したヒナギクの繰り出す津波のごとき屁理屈の勢いには、さすがの理沙も白旗を揚げざるを得ない。だがそんな燃え盛る生徒会長のハートに、小さいころから一緒に居た同性の友人が待ったを

かける。

「だけどヒナ、なんでそんなディテールに拘るんだ？」

「ディテールですって？」

「この動画はヒナのリアクションのほうがメインなんであって、ハヤ太君の告白は前フリに過ぎないんだぞ？ 前フリにそんなに手間かける必要なんてないはずなのに……」

「そ、そりゃあ、真剣さの伝わる前フリでないとクライマックスが引き立たないじゃない？ そうでしょ美希？ 名作ってのはメインだけじゃなくて、そこに至る途中を丁寧に描写するからこそ見る人を引き込めるんであって……」

「どっかのSS書きに言わされてるような理屈はどうでもいいんだけどさ……まさかヒナ、ハヤ太君に告白されたいとか……」

「そそそそ、そんなこと、あ、あ、あるわけ、ななな、ないじゃないの！」

「じい〜」

ヒナギクに告白しては玉碎してきた男の子たちを小さい頃から間近に見てきた花菱美希だけが持つ、彼女特有の恋愛センサーが作動する。本心を絶対に知られるわけに行かない桂ヒナギクは、必死に平静を装いながら『やるからには完璧を』という建前を繰り返した。もちろん美希はそんな言い訳は右から左へと流しつつ、ヒナギクとハヤテの瞳を交互に凝視していたのだが……。

《……いつも何も変わらないな》

花菱美希にとって、ヒナギクに好意を向ける男子のことは見慣れていても、ヒナギクが誰かを好きになる現場を見た経験は皆無。そしてハヤテからヒナギクに向けられている感情は恋慕というより困惑と畏怖に近い。

「ま、考えすぎか」

「り、理沙ちゃんに言われてやっただけだもんね、ハヤ太君は」

「あ、当たり前でしょう。ヒナギクさんが僕なんかに告白されたいわけありませんよ」

幼馴染センサーの意外な盲点のおかげで、ヒナギクは危うく精神崩壊を免れたのだった。その代償としてちよっぴり胸を痛めはしたけれども。



だがそんなヒナギクの孤軍奮闘も虚しく、やがて二度目の精神崩壊の危機が訪れた……彼女にではなく、その相方の側に。

「も……もう限界です、ヒナギクさん……すみません、僕にはこれ以上できる気がしません」

「な、なにを言っているの？ もうあとほんの少しじゃない、ゴールは手の届くところにあるのよ？」

あなたならきつと出来るわ」

「もう無理です……」

技術的と言うより精神的な限界を感じたハヤテがついにギブアップ。恥ずかしいことを無理矢理やらされた上にダメ出しばかり食らっているは無理もない。そしてそんな彼を、この場で唯一の癒やし系女子が優しく包み込む。

「おー、よちよちよち……頑張ったよね、えらいねハヤ太君。もう無理しなくて良いんだよ」

「瀬川さあん……」

「ちよ、ちよっと！」

怒ってばかりのイメージを払拭したくて始めたことなのに、気づけばそれを補強どころか倍増させてしまっている。失態に気づいたヒナギクはあわてて軌道修正を図るが、個人ランキング四位の豊かな胸にかき抱かれた少年の耳にはもう届かない。

「ああ癒されるう……僕、瀬川さんちの子になりたかったなあ……」

「あはは、今からでも家族になってくれていいんだよ♪」

「いいのかハヤ太君、もれなく虎鉄が兄弟に付いてくるんだぞ？」

「そんなの些細なことじゃないですか、この安らぎに比べれば……」

虎鉄以上のマイナス要因だと遠回しにディスられたヒナギクのハートに、このとき深く鋭い亀裂が

入る……そしてその隙間から染み出してきたのは、普段は意識することも少ない闇色の顔をした黒ヒナギクだった。その矛先は棚ぼたでポイントを稼ぎつつある天然少女に向けられる。

《あーそうなの、

貴女はいつでもそうやって、

私の欲しいものを奪っていくのね……

人の姿をした家畜……

ブライドがなく他人にすり寄ることにはかり長けた寄生虫……

胸ばかりに栄養が行ってる脳カラ……

なんておぞましい生き物……

私は貴女を絶対に赦しはしない……》

暗殺者のような視線に刺し貫かれた瀬川泉は首筋を振るわせ、ハヤテはますます怯えて縮こまる。

ここに至ってさすがの理沙たちも、冗談で済ませられる状況ではないことに気づいたようだった。

「そ、そういえばもうすぐ授業が始まるよな！」

「撮影は中止だ中止、急いで教室に向かわなきゃ！」

「ハヤ太君、一緒に行こ？ 大丈夫、私たちが付いててあげるから」
三十六計、逃げるにしかず。子ウサギのように震えるハヤテを連れて、一同は魔女の住まうガーデンゲートから一目散に逃走したのだった。



その日の放課後。生徒会の執務を一人でこなしながら今朝の醜態を思い出して自己嫌悪に陥っていた桂ヒナギクの元に、思いがけない人物が現れた。

「ハヤ……テ君？ えっ、どうして……」

「今朝はお見苦しいところをお見せしました、ヒナギクさん」

「ううん、こっちこそごめんなさい！ あんな風になるだなんて思わなくて……」

「ヒナギクさんの期待に応えられるよう練習してきましたんです。聞いてもらえますか？」

「……え、練習って……」

戸惑うヒナギクを前にして、一呼吸した綾崎ハヤテは蕩々と語り始めた。

僕は今まで、仮面を被って生きてきました。

ひどい親の元で育った自分。借金を抱えた自分。

なんの取り柄もなく、友達にすら相手にされない自分。

そんなものを表に出したら嫌われる。そう思い込んできました。

人の役に立つ、頼りにされる存在になれば自分なんかでもきつと。

そう子供の頃から信じ込んで、それ以外の自分を隠してきたんです。

でも……誰かを好きになるって、そういうことじゃないんですよね。

勘違いしていました。

優しくされたから好きだとか、自分に釣り合わないから止めるとかじゃなくて。

その人を丸ごと受け止めて、何があってもその人と乗り越えていくんだって。

そういう決意そのものが、人を愛するってことなんですネ。

自分に出来る出来ないじゃなくて、やってみせるって決意が大事なんですネ。

《やだ、格好いい……》

ヒナギクはうっとりとして彼の言葉を聞いていた。

もちろん綾崎ハヤテという少年が、こんな歯の浮くような口説き文句を口に出来るタイプでないこ

とは分かってる。おそらくこれは今朝の続き、エキシビジョン動画のための台本なのだろう。

だが今朝の失敗を心から反省しているヒナギクとしては今更ダメ出しをするつもりはなかったし、そうする必要もなさそうだった。不幸な生い立ちをしてきたハヤテが全てを受け止めて前を向こうとしている、たとえ演技だとしても、そのことがヒナギクは嬉しかったから。

それは僕以外の人に対しても同様です。

人は誰でも、良い面と悪い面があります。

当たり前のことなんです。

可愛いところを見たから好きになるとか、意外なところを見たから幻滅するとかじゃなくて。

その人の全てを、良くないところもひっくるめて好きになる。

難しいことですけど、それが真実の愛というものでしょう。

もちろん口で言うほど簡単なことだとは思っていません。

そんな風に思える相手に出会えるのは、まさに奇跡のような確率。

そして今、その奇跡の相手が……僕の目の前にいます。

今朝の醜態など気にしない、怒りんぼな面も含めて貴女を愛する……彼がそう言っているようにヒナギクには聞こえた。

今朝からヒナギクの胸に巣くっていた鬱屈がみるみるうちに清浄な清水に洗い流され、空いたところに優しいぬくもりが満たされてくる。

桂ヒナギクは瞳を潤ませながら、目の前に差し出された彼の手を見つめた。

「いま、僕は宣誓します。

僕という存在の全てをかけて、貴女という存在を愛しぬくことを。

どうか僕の、偽らない気持ちを受け取ってください……

………泉さん！」

「バカーーーッ!!!」

瞬間冷凍されたヒナギクの乙女心は直後に大噴火を起こし、拳の向こうの少年を空高く舞い上げさせたのだった。

F i n .

ハッピーエンドをいつか二人で

レン・リー

「もったいないことをしたものだな」

会話を求めるような声に、僕は振り向こうとも思わなかった。

真っ赤なバージンロード、祝福の花びら、純白のウェディングドレス、輝かんばかりの笑顔。眩しすぎるそれらを、僕は出来る限り網膜に焼き付けておきたかったのだ。

幸せがここにあるような気がする。

それに触りたいのか、壊したいのか、それともただ眺めているだけでいいのか、自分自身でもよくわからない。こんな自問自答をする時点で、心の整理がついていない証拠なのだろうけど。

だけど今、僕はとても嬉しかった。それは本当だ。拍手して祝福しているだけで、胸がいっぱいで涙が出そうなくらい。

「幸せそうですよ。ヒナギクさん」

数え切れないほどの「おめでどう」にかき消されて、その言葉は美希さんはおるか僕の耳にすら届かなかった。

やがて新郎新婦は人垣を抜け、披露宴会場へと向かっていった。

友人たちと連れ立って、僕らも移動を開始する。

花菱美希の姿は、僕からは遠く離れた場所にあった。号泣する泉さんの涙をハンカチで拭っているけれど、彼女自身の目もどこか潤んでいるように見えた。

もったいないことをしたな、ですって？

確かにそうかもしれないですね。

さて、手持ち無沙汰なうちに、少しだけ思い出に浸るとしよう。

どうか少しだけ、お付き合いいただけませんか？

僕と彼女、桂ヒナギクとの交際がスタートしたのが五年前。破局したのが三年前のことになる。

諸々の理由に関してはご想像にお任せするとして……、え？ それじゃ何もわからない？

人と人が完璧に分かり合えることはない、ということですよ。妥協点を探して、上手く折り合いをつけるべきなんです。でも、僕らはお互いを完全に理解し合おうとした。恋愛とは、そうあるべきだと思いついてしまったんです。

経験不足だった、というのもあるでしょうけど、ちょっと夢見がちだったんですよ。お互いに。妥協点を作るんじゃないくて、お互いをすりあわせれば、その差はゼロになると信じてました。

多分、それじゃダメなんだって気づいたのは、彼女が先です。でも僕は見ての通りの唐変木ですから、もうどうしようもない所に来るまで、気づくことができなかった。夢の中の恋に落ちたみたいでした。

彼女は僕に合わせようとしてくれていた。でも、無理をしたらそのぶんすり減るんです。そして冷めていく。何度か話もしましたけど、人間、見たいものしか見えなくて本当なんです。心が離れ始めているなんて、考えもしなかった。

「振られたのは、僕の方です。誓って言うておきますが、僕が浮気をして愛想を尽かされた、というのも、浮気相手に執心してヒナギクさんを捨てたというのも、根も葉もない噂ですからね」

「わかってるわかってる。どうせいつもの誤解だろうさ」

披露宴会場が開く前に、一足先に祝おう、ということと虎鉄さんからビールを受け取った。

一口で酔いが回って、なんだか言うべきでないことまで喋ってしまいそうだ。

「久しぶりじゃないか、こういうの？ 祝い事には酒、理由をつけて酒、我らが担任教師じゃないが、粗暴とかいい加減とかか」

「久しぶりとか、もしかしたら初めてかもしれないですね。立派な反面教師がいたものだから。大

学時代も、そういうのは避けてました。というか、あなたいいとこの坊ちゃん、紳士になるために執事の勉強してた設定だったでしょう。いいんですか？ 雪路先生の真似なんかして」

「飲んで騒ぐ気はないとも。それに、いいとこの坊ちゃんだろうが、社交界だのパーティーだの、嫌が応にもアルコールに触れなきゃならん。ワインの知識なんて知る必要もないと思ってたが、今ではだいぶ詳しくなった」

「ことあるごとに暴走してたあの虎鉄さんが、まあ随分と落ち着いたもので」

「まあ大人になったってことだ。心に決めた人だけは、今でも変わらないがな」

「そっちの方も、世間体気にしたほうがいいんじゃないですか」

問答無用で襲いかかってきた頃を思えば、おとなしいアプローチと言えるのだが、それになびく気にはなれない。恋人がいきなりが、それはない。

さて、それはそれとして、虎鉄さんは大人になった。新しい恋を見つけて、華々しい門出を迎えたヒナギクさんはもちろん、僕のご主人様も、友人たちも、みんな年相応の人間らしく、あるいはそうあるうとしている。

では僕はどうかだろうか。

実を言うと、困ったことに、全く自信が持てないでいるのである。

すでに自覚済みのことではあるのだけど、僕は発展よりも安定を好む。

否が応にも周辺の状況が（主に良からぬ方向に）動くので、そんな性質になってしまった。とも言えるのだけど、それはそれとして。安全、安定した幸せを手に入れたなら、僕はもうそこから進む理由を見つけ出せない。

終わりのないものなどない、ということに気づけないまま時間だけが過ぎて、ルーチンワークの中で昔を懐かしんだり、退屈と寄り添いながら幸せを抱きしめたり。出来ることならそうして生きて行きたい。

そしてまあ、そんな生き方が、誰もが見上げる太陽のような彼女の理解を得られるわけもなく、すれ違いを解消できるわけもなく。

「別れましょうか」

という言葉は、唐突でもなんでもなかった。

僕が彼女の足かせにしかならないことも、彼女が僕に苛立っていたことも、なんとなく気づいていたし、さよならを言う準備も出来ていた。ただ、この安定がそれでも続いてはくれないかと祈っていただけだ。自分勝手極まりない。

そして僕らの、恋人としての時間は終わった。

不思議なことに、僕らは友人に戻ることができたし、ただの友達として接している時は、驚くほど自然に振る舞えた。そして楽しかった。

「僕らは友達に戻れるでしょうか」

別れ際に喉元までこみ上げた言葉を、飲み下してしまったのが良かったのかもしれない。

時々そんな、自嘲的なことを思う。

「まあ、こう言ってはなんだが、ヒナはよく君の浮気を疑っていたよ。それは間違いない。私たちも相談を受けるたびに君のことを散々にけなしたものだ」

「今になってそれを言いますか……」

「今だからこそさ。学生の身分から卒業し、借金を返済し、周囲の環境が変わっても、君の周りには女の子だらけだった。しかも、恋人がいるというのにフラグを立てまくり、あわよくば君を略奪してやろうと牙と研ぐ猛獣たちの鼻先をうろつきまわってるんだ。客観的に見ても、心配するなというほうが無理な話だよ。もちろんわたしは信じていたけどね。ハヤ太君にそんな度胸があるわけないって」

「一応、お礼を言うべきなんでしょうか」

「そんな筋合いは全くないから、安心してくれていいよ」

そう言って、久しぶりに顔を合わせた朝風さんは苦笑した。

本当に、一体いつぶりの再会だろう。

賑やかな談笑がそこかしこで聞こえる披露宴会場、大きなテーブルを囲んだ僕らは、少々手持ち無沙汰に本日の主役たちの登場を待っている。

隣の朝風さんは、着飾ってはいるものの、印象は昔とそう変わらない。それとも意図的にそうしているのだろうか。

「あんまり変わりませんね。朝風さんは」

思い切って聞いてみた。

「本当？ そう見える？」

「ええ、でもちよっと、昔より頭が良さそうに見えなくもないですね」

「人のことは言えないが、君も結構失礼なあ。ハヤ太君。三馬鹿はずっと前に卒業したんだよ」

「あと、そうですね。もしかしてもうすぐ苗字が変わるとか？」

顎に手を当てて、昔テレビで見た探偵を気取るように、僕は言った。

彼女の左の薬指に、素朴な指輪がはめられているのには、最初から気付いていた。本当だ。決して、これ見よがしに左手を頬に当てていたからではない。本当ですよ？

朝風さん、いや理沙さんは、懐かしいあの不敵な笑顔を浮かべる。

「なかなかプロポーズしてくれなかったんだけどね。この度めでたく、というわけさ。もうすぐわたしも、ヒナのように花嫁衣装に身を包むことになる」

「式には呼んでくれますか？」

「もちろんだとも。ただし条件がある」

「条件？」

「今度料理を教えて欲しいんだ。レパトリーを増やしたくて。花嫁修業、手伝ってくれる？」

「……構いませんが、僕があわよくば略奪してやろうと牙と研いでいる猛獣だとは、思わないんですか？」

「君にそんな度胸があるわけないって信じてる、とも言ったはずだよ。うちの人は、そのへんおおらかな気質でもあるしね」

動じないと言うか、からかい甲斐のないひとである。彼女が忙しくなる前に、本腰を入れて指導するでしょう。

「そう言えば、君の恋人がそのあたりを気にするかどうか、まだ聞いてなかったな。大丈夫なのか？」

「いえ、僕は今は……」

と、会話の途中で照明が落ちた。

司会進行を務める愛歌さんの声が、会場内に響き渡る。

新郎新婦入場の時間だ。

会話を切り上げ、会場入り口に目を向ける。

少しだけ扉をあけて、スタッフが会場を確認する。その向こうに一瞬だけ見えた、純白のウェディングドレスと、見間違えようもないピンクの髪。その肌触りを求めるように、右手の薬指が動いた。嬉しい？ そうだ、嬉しい。彼女の輝かんばかりの笑顔は、何よりも。

どうだろう。なぜだろう。心臓が痛いくらいに鼓動を強める。視界が狭くなる。

言うんだ。ただ一言だけでいい。

機会はいくらでもある。結婚おめでとございます。って。

そうすれば、僕は。

「何がそうすれば、なの？」

目が覚めた。

木造の天井、ひりひりとした喉の渴き、やけにはっきりとした目覚めだからだろうか、目の奥がツンと痛む。肌寒い季節にも関わらず、背中には汗で濡れた感触。

そして目の前には、こちらを心配そうに覗き込む、ピンクの髪の愛しい、恋人、だったはずだ。乱れる呼吸を整えて、なんとか声を出す。

「あれ、なんで、ここに？」

すると、途端に彼女、桂ヒナギクは不機嫌そうに眉を寄せる。

「同じ屋根の下に住む恋人の様子を見に来て、何か不都合でも？」

「え、いやそういうことでは」

そうだ。僕らは今、かつて大所帯で経営していたアパート、ムラサキノヤカタに部屋を持っている。

というか、僕が管理人を任せられているところに、彼女が部屋を借りている。

互いの部屋にはいつでも行き来できるし、例えば朝起こしに来るくらいのことは、日常茶飯事のはずだ。しかし今は、目に見えるものすべてに、不安を感じる。

今のは、そう。

「ただ少し、悪い夢を見ていました。何もかもを後悔して、それになんとか決着をつけようともがいている、虚しい夢でした」

「……そうね、確かにうなされているように見えたけど。うわごとでよくわからないことを言っただし。結婚がどうか」

そこまでバレているのか。

夢診断には詳しくないけれど、あれは僕の不安そのままの光景だった。いつか失ってしまいかもしれない幸せ。もっともらしい理由まで付けて、それでもなお現実感の薄い、ちっぽけな予防線。先に不幸を覚悟しておく、というのは慣れたことだけれど、無意識下でもそんなことをするのは、なんとも救い難い。

……本当に夢だろうか？

「どうしたの？ 私を無視してどこかに電話？」

「ちょっと確かめたいことがあります」

アドレス帳の先頭に、その連絡先はあった。何度目かのコールの後、電話が繋がる。

「もしもし、綾崎ですが」

『なんだ、ハヤ太君。わたしはできれば二度寝をしたい気分なのだが』

「いえ、ちょっとお聞きしたいことがあります。すぐに済みますから。ええ、朝風さん、近々結婚の予定とかありますか？」

『……………今のところ、予定どころか恋人もない完全なフリーだが、なんだ、ヒナに飽きてわたしに乗り換えようということか？』

「そんなつもりは毛頭ありませんので、ご安心ください。ちょっとその、まあ話すと長くなる話なので、詳しいことはまた今度。二度寝をお楽しみください」

『いきなりかけてきてそれはないん』

切った。

胡乱な目つききの恋人は何か言いたそうな顔をしているが、さて。

肌寒い季節ではあるが、空は快晴。確か僕は今日はお休みをもらっている。予定は今のところ何もなし。

「……どうということ？」

「朝食を食べながらゆっくり話しましょう。これから簡単なものを作るので」

「もう出来てる。食べるでしょ」

なんと、僕は幸せ者である。

「それじゃあいただきます。で、ですね。朝食を食べ終わったら、デートに行きませんか？」

彼女は驚いて、少しだけ頬を緩めた。

「そんな付き合いたてのカップルみたいなこと、今まで言ってくれたことなんてなかったのに、どういう風の吹き回し？」

「たまにはいいんじゃないでしょうか。それで？ 何が先約でも？」

「いいわよ、わたしもどこかに出かける気分だったから。それで、どこに行くの？」

「買い物とかでどうでしょう。見たいものがあるんですよ。服のついででいいので、ちょっと付き合っ

てください」

「OK。それで、ちゃんとさっきの説明はしてくれるんでしょうね？」

「もちろん」

僕は立ち上がり、着替えを済ませて朝食を摂ることにした。

さて、今日の予定を整理しておこう。

まず、先ほど見た夢の話を、オブラートに包んで話す。朝風さんへの電話の件もそうだけれど、僕のことあることに浮気を疑われてしまうようなので、慎重に話さなくてはならない。

次は面白い物だ。まずは洋服がいいだろう。そろそろ春の新作が出る頃だし、彼女も僕も退屈はすまい。昼食を済ませたら、目をつけておいた宝飾店に足を運ぶ。

大したものはい買えないけれど、何、大事なのは気持ちだ。そして言葉だ。

善は急げ。

あの夢を正夢にする気は、僕にはさらさらしない。ならば行動はすぐに起こすべきだ。

僕の不安、彼女の不安、些細な不和は解消できる。時には妥協で手を打とう。

プロポーズの言葉を考えながら、僕はまだどこか不満げな彼女に語りかける。

さあ、今日も忙しくなりそうだ。

そんな予感に、僕はついついにやけてしまって、また彼女に不審がられてしまったのだった。



あとがき

(※小説作品掲載順、敬称略)

こんにちは、瑞穂です。

ハヤヒナ合同本2の発刊おめでとうございます。

ハヤヒナということで、ジャンルは迷わずに書き慣れているカップリングに決めましたが、拙作は書き方をこれまでの三人称で通常の口調から、一人称で柔らかい口調へと変更しました。ですから今回の合同本はある意味、自分にとって新境地を開くことへの挑戦でもありました。

それとは別に今回の執筆では、グーグル先生に教えてもらいながら同じような表現を避けて楽しく考えながら書くこうと心掛けるうちに、自然と出来上がった気がします。

SSの内容につきましては、著者が毎日神様へお祈りしており、最近拝聴する音楽が合唱ということからネタにさせていただきました。また春に発行するにも関わらず、秋ものを執筆するというひね

くれ者ですみません。

そして原作では素直ではなく神仏を信じないヒナギクさんが、ハヤテくんへの想いが強まるにつれてお祈りを重ねて素直になっていきます。その想いと神仏への信仰がヒナギクさんを変えて、ハヤテくんをも動かした、といったところでしょうか。

相変わらずの駄作ですが、提唱者の春樹咲良さん、ここまで読んでいただいた読者さんありがとうございました。

また機会がありましたら参加したいですね。
瑞穂でした。

(瑞穂)

桂流剣術指南ノ書 卷一覽

卷ノ一・竹刀編 … まずは基本の竹刀を使った戦い方から。ここを疎かにすると卷ノ二以降のより高度な内容が習得できないので読むだけじゃなく練習までしっかりやり込もう。一般的な剣道と構え方などは同じだが、桂流の方法で練習を積むと振りや踏み込みの鋭さがツーランクほど上のレベルま

で到達できる。執筆予定なし。

巻ノ二・正宗編前 …… 鷲ノ宮家の秘宝の正宗の扱い方を会得するための巻。桂流とは。正宗編と言いつつ、実際には木刀の使った剣術について記述されている。正宗は一般的な木刀よりクセが強いので、まずは普通の木刀を使った戦い方を会得することから始めよう。防具なしでの戦闘を想定しているせいか、巻ノ一と比べると殺傷力の高い技が多い。執筆予定なし。

巻ノ三・正宗編後 …… 正宗編の後で、実際に正宗を扱うときの技法や留意事項が分かりやすくまとまっている。正宗は武器としての攻撃力の高さはもちろん、潜在能力解放という固有アビリティが付いているのが大きな特徴。感情の制御が十分でないと暴走してしまうため、この巻を徹底的に読み込んで内容を理解したうえで実践に移ろう。執筆予定なし。

巻ノ四・白桜編 …… 王族の庭城に隠されていた宝剣・白桜を使いこなすための巻。白桜は正宗以上の能力を持つが、巻ノ三までを完璧にマスターできていれば十分白桜を扱えるだけの実力が備わっているはず。逆に巻ノ三までの習熟度が不十分だと、暴走どころか自滅してしまうのでプランクがある場合などには先に巻ノ一〜三までをしっかりと復習しておこう。執筆予定なし。

卷ノ五・秘伝奥義編 …… 桂流剣術の奥義書。その正体は正宗と白桜の能力を共鳴させることで使用者の能力を際限なく上昇させる二刀流である。ただし、正宗と白桜の特性を十二分に理解し、かつ出力を自在に操れるようになっていなければヒナギクのように制御しきれずただの破壊兵器になってしまふ。ヒナギクは出力制御の習熟度がまだ不十分だったので本編のような結果になってしまったのだと思われる。この巻を会得すれば文字通りの“無敵”となれる。

カップリングもの期待してた人がいたらごめんね！ どうも、明日の明後日です。

ずいぶんと久し振りにSSを書いたなーと思って、前回の投稿を調べてみたのですが、なんと二〇一五年の六月だそうで。一度クイズ大会の合同本に寄稿させていただきましたが、そのときは転載枠だったので、一年半以上もお休みしていたのかと思うと我ながら「うわぁ」と思うところと「そんな時間之余裕ないしなあ」と思うところがあり。止まり木メンバーの中でも仕事しながらSS書いてる人は大勢いらっしやいますが、みんなすげえなあ。

さて、今作についてというところで述べておかねばならないことですが。作中での白桜の能力は九割

以上が私の妄想であります。なので、「あれ、そんな設定あったっけ？」とコミックス読み直したりしなくていいんだからね！ 庭城を保持するための力を白桜が供給していた、的な下りがあったと思うのですが、そこから妄想の羽を広げた次第でございます。

作中でのヒナギクが脳筋というか、なんだか残念な感じになってしまいました、ヒナギクファンの方々ごめんなさい。思い付いたからやった、でも後悔はしていない。当初は暴走ヒナギクVSアテネ&伊澄(&ハヤテ)の戦闘シーンも書くはずだったけど、それだけの技量がないのと收拾がつかなさそうだったので断念。アホな話というか、ギャグ寄りの話を書きたかったのに地の文は大部分が大真面目になってしまいました、どうしてこうなった。

なんにせよお楽しみいただけただけなら幸いです。

(明日の明後日)

ヒナギク刑事と執事の推理モノを期待した方にはごめんなさいです。

恋愛にはちょっとした勢いや雰囲気の流れることが多々あると思います。

ヒナギクさんは何度かの絶好機を悉く逃していますが、何かの弾みでこんなことが起こる可能性も

あったのではないかと。

ところで、ヒナギクさん目指して駆けるハヤテの側にも何かの物語があったはずですが……。書くだけの余裕はありませんでした。ご容赦。

(どうぶん)

いつもお世話になっております。春樹咲良です。

前回に続いて、今回も言い出しっぺのくせに自分の原稿が難産を極めるパターンでした。執筆陣の中で最後の原稿提出になってしまいました。何とか自分の原稿も載せた合同本をお届けすることができ、安心しています。

合同本全体としての振り返りは編集後記で書くとして、今回のお話について少しコメントをしておこうと思います。目次上のタイトルは前回と同じものになっていますが、今回も拙作『secret nightmare』の番外編としての位置づけになります。小説掲示板での投稿は滞ってしまっただけですが、もし興味を持っていただけましたら、そちらの方もよろしく願います。

話のネタ自体は、もしかしたらお気づきの方もいらっしゃるかと思いますが、某魔法先生の出で来

る漫画の一場面のオマージュとなっております。ちなみに、握力が強くても腕相撲が強いわけではないと思います。

三人娘は話を作っていく上で色々と便利なので出している部分がありますが、今回はちょっと泉の扱いが雑だったかなあという反省点もありますね。次回以降の合同企画が果たしてどうなるのか、本誌の連載の行方からも気になるところですが、次があるようならこの反省を活かしていきたいですね。

ここ最近是个人的に色々と周辺に変化が多く、あまりサイトの方に顔を出していませんが、今後もこうした活動に関わっていくことができたらと考えています。これからどうぞよろしくお願いいたします。

(春樹咲良)

にゃんばすー、RRです。第二回ハヤヒナ本の刊行おめでとございます。前回がもう三年前……時の流れが早すぎて信じられないですね。

さて、お話について。今回は連載中(更新してるとは言っていない)の「しあわせの花」のエピローグの一つを書きました。あくまで「エピローグの一つの形」なので、掲示板での連載の最後は別の話にな

るかと思えます。たぶん。おそらく。

実は最初はココ最近の合同本と同様、他作品のキャラが出る話を考えていました。が、漫画「それでも町は廻っている」を読んで影響されたことで、締め切り一週間ほど前に方向転換しました。料理の基本「さしすせそ」でしようゆばっかり入れられる話と、「今の感じ」を語る話、どちらも「それ町」にあっただもので、それをハヤテキャラにやってもらいました。あの連載のハヤヒナであれば、プロポーズであってもアリスちゃんの介入は避けられないのだろうと思います。

さて、この締め切り後の三月三日にヒナギク役伊藤静さんの非公式イベント「Daisy!!」を控えています。デイジーって英語でヒナギクって言いますが、いったい何のイベントなのでしょう？しかもゲストにはハヤテ役白石涼子さんもいるとか。うーん、なんのイベントなのか？楽しみです。

最後に、主催の春樹咲良さんはじめ携わったみなさんありがとうございました。

(ロッキー・ラックーン)

Q. 天才たち？

A. はい、すみません。

Q. 頭脳戦？

A. はい、すみません。

Q. ハヤヒナ？

A. ……ほんとーにすみません!!

(双剣士)

バッドエンドかと思った？ ハッピーエンドでしたー!

という話にしたかったのですが、正確に言えばここからハッピーエンドになるかどうかは、皆様の心次第でございます。

ビターな話にするつもりが、いつの間にやら夢オチになっていました。何を言っているかわからな
いと思うが、むしろどうしてこうなったのかこっちが聞きたい。

P すけさんのコラボイラストから得たイメージを文章にした今回、合同本の賑やかしにでもなっ
てくれたら幸いです。完成楽しみにしています!

(レン・リー)

編集後記

改めまして、春樹咲良です。

有志によるテーマ競作形式の合同本は、三年前の第一回ハヤヒナ合同本をきっかけに始まりましたが、その後も「クリスマス」、「バレンタイン」、「イラスト合同」、「日曜日の出来事」と、順調に広がりを見せているようで何よりです。そんな中での、原点回帰のような第二回ハヤヒナ合同本は、前回より作品数もボリュームも大きく増したものになりました。

順調に行けば、ヒナギクの誕生日に刊行となります。ちなみに、二〇一七年三月三日には、ヒナギクは二八歳の誕生日を迎えていることとなります。紛うことなきアラサーですね。そろそろ結婚が気になるお年頃、ということと関係があるわけではないでしょうが、今回は結婚に言及した作品も多く見られました。皆さんそれぞれの個性に溢れた、賑やかな作品になったと思っております。

今回も、止まり木管理人の双剣士さんには大変お世話になりました。皆さんのお力添えによって、無事に合同本を送り出すことができました。厚く御礼申し上げます。

春樹咲良

第2回 ハヤヒナ合同本
Spring up in the Spring of Life

2017年3月3日 発行

表紙・挿絵イラスト ピーすけ

編集 春樹咲良

公開 ひなゆめファンの止まり木

(<http://soukensi.net/perch/>)